42245
教科書文庫
4
810
42-1928
20000
33918

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

新定女子圖文

巻五

375.9
Y019
資料室

資料室
375.9
Y019

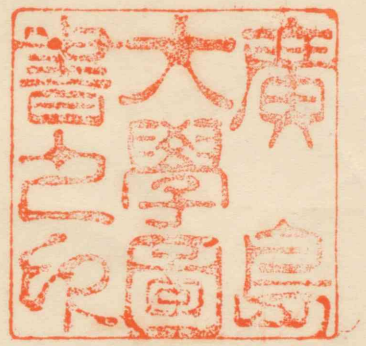
昭和三年二月二日
文部省檢定濟

吉田彌平編

新定女子國文 卷五

金港堂書籍株式會社

375.9



新定女子國文　卷五

目次

一　峠の茶屋……夏目漱石……一
二　櫻……市島春城……六
三　不撓の氣力……森鷗外……三
四　幼き日……加藤武雄……五
五　都會の川……室生犀星……三
六　新緑の美……上原敬二……四
七　戰時の巴里……島崎藤村……六

八　十國峠の眺望……高山樗牛……一二四
九　螢……横山桐郎……一二七
一〇　家業の變遷……吉野作造……一二七
一一　照る月影……一三三
一二　旅に出づる少女に……佐々木信綱……一三六
一三　たしなみ……五十嵐力……一四〇
一四　蓮月尼……鹽井雨江……一四四
一五　蒲の花がたみ……瀧澤馬琴……一四九
一六　本栖と精進……荻原井泉水……一五七
一七　九十九里濱……德富健次郎……一六七
一八　赤道をこえて……吉江孤雁……一七五
一九　アルプの夏……槇有恆……一〇二
二〇　樂地……幸田露伴……二一〇
二一　黑井繁乃……二一四
二二　月と草木とのさゝやき……三木露風……二一三
二三　信……安藤圓秀……二二四
二四　愼獨と無慾……頭山滿……二二九
二五　ピヤノ……芥川龍之介……二三四
二六　萩……薄田泣菫……二三九
二七　禁庭の野分（昭憲皇太后御作）……二四三
二八　空ゆく雁……〔曾我物語〕……二四五
二九　夕ぐれの時はよい時……堀口大學……二四八
三〇　讀書……坪內逍遙……二五二

新定女子國文 卷五

夏目漱石

夏目漱石
名は金之助
英文學者
小說家
大正五年歿す

文久錢
文久三年に鑄た
文久永寶といふ
錢
明治時代一厘五
毛に通用した

一 峠の茶屋

「おい」と聲を掛けたが、返事がない。

軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。向側は見えない。

五六足の草鞋が寂しさうに庇から吊されて、屈託氣にふらりふらりと搖れる。下に駄菓子の箱が三つばかりならんで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

「おい」と復聲をかける。土間の隅に片寄せてある臼の上にふく

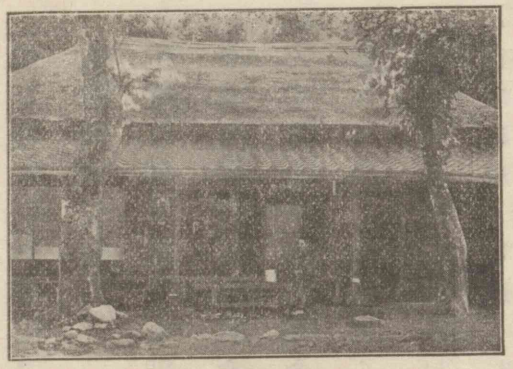
れて居た雞が驚いて眼をさます。くゝゝゝ、くゝゝゝと騷ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてゐる上に、眞黑な茶釜がかけてある。幸、下は焚きつけてある。返事がないから、無斷でずつと這入つて、床几の上へ腰を卸した。

夏目漱石

雞は羽搏きをして臼から飛下りる。今度は疊の上へあがつた。障子がけゝつこつこと云ふ。締めてなければ、奥まで駈け拔ける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこと云ふと、雌が細い聲でまるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。

床几の上には一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろ

を捲いた線香が日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に收る。



峠の茶屋

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出た。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火は燃えてゐる、菓子箱の上に錢が散らばつて居る、線香は暢氣に燻つて居る、どうせ出るには極つて居る。しかし、自分の見世をあけ放してゐるところが都とは少し違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけていつまでも待つてゐるのも、少も苦にならないと見えるとこ

し二十世紀とは受取れない。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、嘸御困りでござんしよ。おゝ〳〵、大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「そこをもう少し焚き附けてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と立ちあがりながら、しつ〳〵と二聲で雞を追下げる。こゝこと駈け出して雌雄は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛び出す。

「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか刳抜盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黑く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に燒きつけられて居る。

「御菓子を。」と、今度は雞の踏みつけた胡麻ねぢと微塵棒を持つてくる。

婆さんは袖無しの上から襷をかけて、竈の前へうづくまる。余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「えゝ、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「生憎今日は――先刻の雨で何處へか逃げました。」

折柄竈の中がぱち〳〵と鳴つて、赤い火が颯と風を起して一尺あまり吹出す。

「さあおあたり。嘸御寒かろ。」と云ふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに微かな痕をまだ板庇にからんで居る。

（鶉籠）

市島春城
名は謙吉
早稲田大學名譽理事

二　櫻

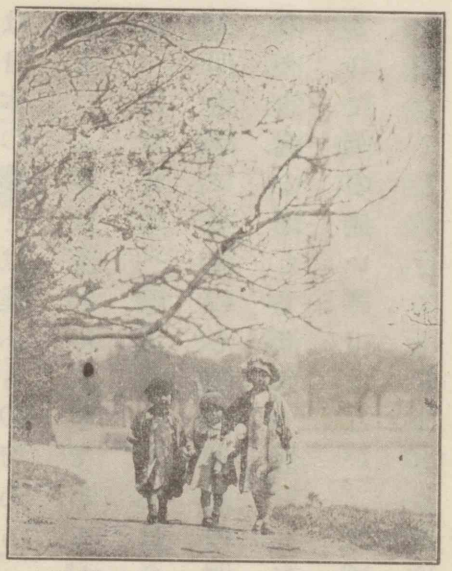
市島春城

櫻が日本の名花と呼ばれ、あらゆる日本の花の代表と考へられて來たのは隨分古くからのことであるが、如何なる意味で名花であり、何故に日本の代表的の花であるかに就いては、餘り適切な説明を聞かないやうである。

これについて段々研究した人の説によると、第一、櫻は絶對に他の國にない。ヒマラヤあたりに櫻の木があるともいふが、それは日本の櫻とは違ふものである。支那は我が隣國であり、現に櫻といふ字は支那の文字であるが、支那の櫻は日本の櫻とは違ふ。古來日本へ輸入された木は色々あり、そしてそれらの木は大抵諸國に共通のものだが、此の櫻に限つて日本のと等しいものは他國に絶えて無い。勿論近來になつて、これが外國へ移植された例の無い譯ではない。米國あたりでは或木に日本の櫻を接ぐことが行はれて日本と同じ花を咲かせるさうだが、それは全く日本から移したものに外ならぬ。斯樣に日本以外に無いといふのが此の木の第一の特長であつて、それがやがて日本

ヒマラヤ Himalaya 印度の北境の大山脈

の代表といふことになるのである。次に、大抵の木は盆栽になるものであるが、櫻に限つてどうしても盆栽に仕立てることが出來ぬ。無理に小さな木を盆栽にして見ても、僅か一年位保つだけで決して盆栽としてながくは育たぬと謂ふ。此の事を考へると、櫻の性は極めて牢落不羈で、窮屈な天地に跼蹐するを好まぬものと見える。さうしてこれがまた日本の國民性を現はして居るともいふことが出來る。又多くの木は剪れば勢の附いて來るのが例で、剪るといふことが一種興奮的の働



米國ワシントン市の櫻花

をなすものであるが、櫻に於ては剪ることは大の禁物である。諺にも「梅は剪らぬが馬鹿、櫻は剪るが馬鹿。」とまで謂はれて居る。昔武士道の盛な時分には櫻を以て武士に比した、それは勿論他の意味で、譬へたのだが、きられることを好まぬといふことも、また武士を代表して居るものと謂へるであらう。それから又櫻が或季節に至ると一時に花が咲いて、僅か三日も經たぬうちに惜しげも無く散つてしまふ、其の執着の無い、如何にも淡泊である所は、江戸子の宵越の錢は使はぬといふ肌合にも似て居る。所謂宵越の錢は使はぬといふ如き浪費の風はあまり褒めた話では無いが、日本の國民性には何處かにさうした淡泊な所のあるのを疑ふことが出來ぬ。凡そ此等の特長はあらゆる樹木のうち、獨り櫻のみが持つて居るもので、若し櫻が日本の名花であ

り、且日本の國民性を代表して居るものとすれば、それは此等の特長あるが爲に外ならぬ。

猶附け加へて言ふべきは、日本の文化に對する櫻樹の貢獻といふことである。前にも言つた通り櫻は他の如何なる國にも無いのであるが、其の材は版刻の材料として最も優れたもので、久しい間書物の版木に用ひられた。此の材には木理や纖維が殆ど無い結果として、刀を縱に下さうと、横に下さうと、少しも淀みが無い。さうして木の質は柔か過ぎもせず、又硬くも無い。斯樣な條件を具備して居るものは櫻の外には無いので、古來文字を刻するには必ず櫻の板を選んだ。別して畫を刻するにはどうしても櫻で無くてはならぬとされた。例へば美人畫の如き、彫つてふつくらした味を出すには、此の木で無くては叶はぬ。

向島春景（安藤廣重筆）

浮世繪の版刻の發達した一つの原因は幸にして斯樣な版木の材料が日本にあつたお蔭とも謂ひ得る。日本に古く使はれた版木が維新以來盛に支那へ持つて行かれたといふのも、畢竟支那にはかゝる良材が無いため、日本で使つた古版を潰して更に之を彫刻の材料にするためであつた。古來櫻樹が文字のため又は繪畫のために如何に多く伐られたか、實に莫大なものと思はれるが、併し其の木の多く伐られたこと

不撓の氣力
本文はデンマルクの文豪アンデルセンの作を鷗外が譯した卽興詩人の一節である

森鷗外
名は林太郎
醫學者
文學者
醫學博士
文學博士
陸軍々醫總監
東京帝室博物館總長
大正十一年歿す

が取りも直さず日本の文化に多く貢獻したことになる。此の意味からいふと、此の木は日本の文化のために日本に限つて生じた一種の文化木ともいふべきもので、其の點から見ても櫻は日本に頗る大切な關係を持つものと謂はねばならぬ。（春城隨筆）

三　不撓の氣力

森鷗外

淺き湖あり。暗き林はそを環れり。湖の畔なる巖は峙ちて天を摩せんとす。こゝに暴鷲の巢あり。母鳥は雛等に敎へて稚き翼を振はしめ、又その目を鋭くせん爲に日輪を睨ましめき。さて母鳥の言ひけるやう、「汝等は諸鳥の王なるぞ。目は利く、拳は强し。いでや飛べ。飛びて母の側を去れ。我が目は汝を送り、我が情は汝の上を歌ふべし。其の歌をば『不撓の氣力』と題せん。」といひき。

雛等は巢立せり。一隻は翅を近き巖の頂に斂めて晴れたる空の日を凝矚すること、其の光のあらん限を吸ひとらんと欲するが如くなりき。一隻は高く虛空に翔りて大圈を畫し、林樾・沼澤を下瞰するが如くなりき。岸に近き水面には綠樹の影を逆さまにせるありて、其の中央に碧空の光を蘸すを見る。

時に大魚の浮べるあり、其の背は覆りたる舟の如し。忽ち彼の雛鷲は電の擊つ勢もてさと卸し來つ。刃の如き利爪は魚の背を攫みき。母鳥は喜び色に形れたり。然るに鳥と魚とは力相若くものなりければ、鳥は魚を擧ぐ

ること能はず、魚は鳥を沈むること能はず、打込みたる爪の深かりし爲に、これを拔かんとするも亦意の如くならず、茲に生死の爭は始りぬ。

鷲（狩野芳崖筆）

今まで靜かなりける湖水の面はこれが爲に搖り動かされ、大圈を成せる波は相重なりて岸に迫れり。既にして波上の鳥と波底の魚とは一齊に鎭まり、鷲の翼の水面を掩ふこと蓮葉の如くなりき。忽ち隻翼は又聳ち起り、竹を割く如き聲と共に、一翼はひたと水に着き、一翼は劇しく水を鞭うち、沫飛ばすと見る間に、鳥も魚も沈みて痕なくなりぬ。母鳥は悲鳴して、巖角なる一隻の雛を顧みるに、こも何時かあらずなりぬ。首を仰いで遠く望めば、唯一黑斑の日に向ひて飛ぶを見き。母鳥は悲みを轉じて喜となしたり。その胸は高く躍りて、その聲は折るれども撓まぬ力を歌ひぬ。

（卽興詩人）

四　幼き日

加藤武雄

加藤武雄
小說家

小學校
作者の鄕里は神奈川縣津久井郡川尻村

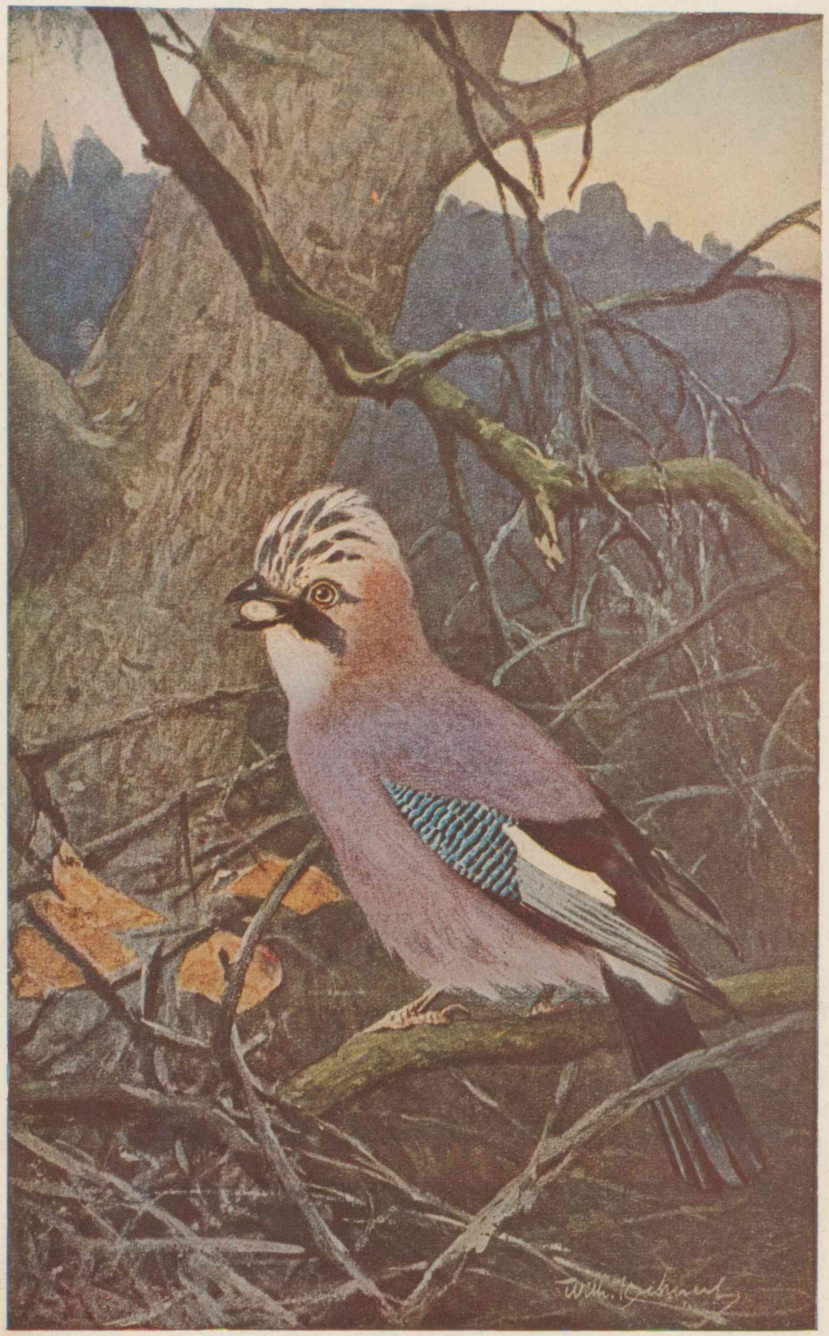
春が深くなると共に麥が伸びる。桑が芽を吹く。麥畑・桑畑の間を帶のやうに伸びた野路を十二三町、二つ三つの部落と一つの驛とを通りぬけて、その驛のはづれの高臺にある小學校へ、私は尋常を四年、高等を四年、前後八年通つたのである。

私は偏屈な子供だつたので、往きにも復りにも友達の群を離れ

て一人の時が多かつた。私は一人寂しく其の野路を歩きながら、麥笛をこしらへては吹き鳴らした。麥笛、田舍育ちの人達は皆知つてゐよう。あの柔かな麥の莖を二三寸の長さに切つてこしらへた小さな笛、唾をつけて吹くと單調な音を出す小さな笛、私は好んでそれを吹いた。それを吹き〳〵長い野路の盡きるのを忘れて歩いた。私は今でもあの麥の莖の甘酸つぱい舌觸りをあり〳〵と想ひ起すことが出來る。其の頃の私は悲みをも、喜をも、寂しさをも、あこがれをも、あの單調な麥笛のしらべの中に、自由に歌ひ出すことが出來たのだつたが——麥笛で思ひ出したが、まだ笛にする事が出來るまでに麥が大きくならないで、黑い土に飛白の模樣を置いてゐる頃、だから勿論冬のうちのことだが、私達はよく麥踏みといふ事をさせられた

懸巢
燕雀類の一種
かしどり

ものだ。霜柱で根が拔けあがるのを防ぐため、またより強く伸びる力を刺戟する爲に、二三寸位に生えあがつた麥の芽をわざと踏みつけてやるのだが、其の麥踏みの時、土の中から栗の實だの樫の實だのが、ころ〳〵と足もとに轉び出る事があつた。こんな處にどうして？と、不思議に思つてきいて見ると、祖父は次のやうな事を話してくれた。それは懸巢が山から啣へて來てそこへ埋めておいたのだ。懸巢はそれを埋める時、空にある雲を心覺えにして、その雲の下に埋めるのだが、其の心覺えの雲はすぐに動き去つたり消え失せたりする。かはいさうに懸巢の奴、折角埋めておきながら、見つけることが出來ないのだ——私は子供心に心から懸巢を憐んだことがあつた。それは唯懸巢ばかりの悲みではないといふことを、二十年後の私はよく知



すけか

つてゐる。

懸巣といふ小鳥を諸君は知つてゐるであらう。小鳥といへば、私の生れた村のあたりには實に小鳥が澤山居た。高等科の二年だつたと思ふが、私の仲間に目白を捕つてそれを飼ふことが一つの流行になつて、「おれは三羽もつてゐる。」「おれは五羽もつてゐる。」などと自慢しあつたことがあつた。――だが、何といふへまな少年だつたらう。私はどんなに黐竿を振廻して見ても、一羽も捕ることが出來なかつた。友達に一羽貰つたやつさへ、餌をやる時に逃してしまつた。

數へ年の十五の春に學校を卒業した。十五の春、私はその時始めて春の哀しみを知つた。――それでなくてさへ沒落の運命

にあつた私の家は、其の前の年の暮に火事を出して、何も彼もすつかり燒いてしまつた。唯一つ燒け殘つた裏庭の土藏の廂の日溜りに蹲踞つて、「東京苦學案内」といふ本を讀んでゐると、そこへ父がやつて來た。父は私の手から其の本をとりあげて一寸表紙を見て、默つて私の手に戻したが、其の時の父の微笑は寂しかつた。

卒業式が濟んだあくる日に、卒業記念として學校附屬の樹栽地に苗の植附に行つたことも忘れがたい思出である。三十人ばかりの卒業生は、先生たちや村役場の吏員達に率ゐられて、幾千本の杉苗を車につけて、其の山深い樹栽地へと出かけて行つたのであつた。山と山との間の溪流に沿うた谷間の小路を一里近くも入つたところ、そこに山裾の斜面を切開いて、私達は其の

杉苗を植ゑ附けたのだつた。私と私の一番仲の善かつたKとTとの三人は互に祝福し合ひながら、殊に念入りに一本づつの苗を植ゑて置いた。

「どんな事があつても、此の三本は枯れる事は無いよ。」

「一番大きく、一番高く――どうかしつかり育つてくれ。」

「十年經つたら三人で見に來ようよ。」

三人はこんなことを話し合つた。そして手拭の端を切つてそつと其の根元に卷いておいた。KもTもY市の中學へ行くことになつてゐたが、私だけはどうするともきまつては居なかつた。並べて植ゑた三本の杉の木――其の中でも、私の分だけは無事に育ちさうもない氣がした。

漸く苗を植ゑ了へた私達はもう日が暮れて暮靄があたりを立

ちこめる頃になつてから、やつと山を降りて部落の方へ出て來た。仲の善かつた同志が三々五々と打連れて、いろ〳〵話しながら、其の溪流に沿うた山間の道を歩いた。うす暗く靄のこめた路傍の林で時々小鳥の鳴く聲がした。

「さやうなら。」

「さやうなら。」

部落の方へ出ると、其の八年の間一緒に學んだ友人たちは、五六人づつ、二三人づつ群を離れてそれ〴〵の家路へと別れて行つた。其の「さやうなら。」がつまりお互のフェーヤウェルであると共に、又私達自身の少年時代への別れの言葉ではなかつたか。

「さやうなら！」

あの友達の大部分とは、その時ろく〳〵顏も見合はさないで、唯

フェーヤウェル　御機嫌よう　左樣なら
Farewell

その簡單な一語を發して別れたまゝそれきり一度も逢はないのである。――あの時別れて行つた友達の後姿、それは「少年」そのものゝ後姿だつた。私は今でもなつかしくそれを思ひ浮べる、その春の夕の靄の中に永久に消えて行つてしまつた後姿を。

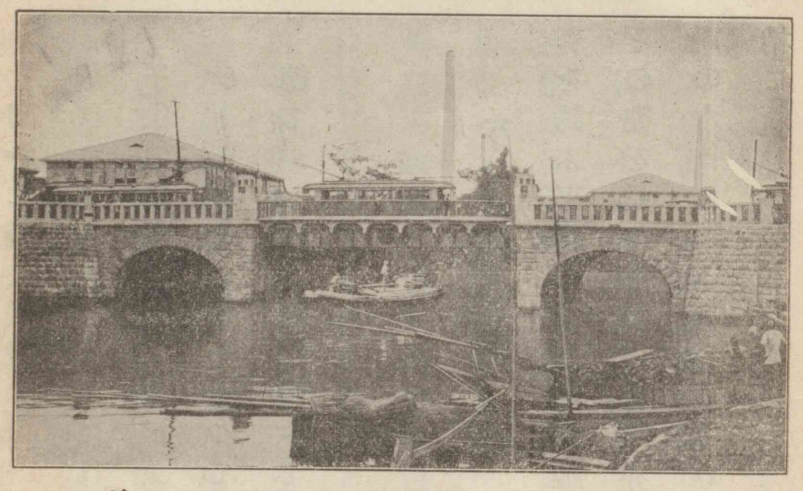
（わが小畫板）

室生犀星

室生犀星
名は照道
小説家
詩人

五　都會の川

雨は靜かに降りそゝいでゐる。
川の上はしんとして
こまかい音を立てゝゐる。
をり〳〵電車がどんよりした上に影をうつしてはゆく。
幾艘となく荷足船がつながれてゐる。



東京市　汐留川

船は動いてゐるやうで、
そのまゝつながれて
雨にうたれてゐる。
屋根庇から煙がひとすぢ上つてゐる。
窓から橋の上の電車を一人の子供が
いつまでも熱心にながめてゐる。
往來の人かげもみな水の上にうつつては

しづかに消えてゆく。

煙はやはり上つてゐる。

子供の母親らしい女が

ひと束の青い葱を洗つてゐる。

總てがしんとした雨中で橋のかげになつてゐるのである。

（田舍の花）

六　新綠の美

上原敬二

上原敬二
林學博士
東京高等造園學校長

佐保姫　春の神

春を誘ふ東風にまづ佐保姫は素足で淺綠の野に下り立つた。その姿を見て早春の自然界は甦るに忙しい。蕾はふくらみ、小川の水はぬるみ、灰色の眠れる空は紅潮し、寂しげに立つ並木の梢に新しい芽が萌す。

シンボル Symbol　象徴

トーン Tone　調子

新綠の天地は青春の象徴であり、希望のシンボルである。さういふ内面美は美意識の高い人にのみ味はれるが、しかし現實界に於ても亦優れた色の覇者として春のトーンを示してくれる。新綠と云ひ、綠の天地と云ふものゝ、春の新芽は決して綠のみではない。又その系統の色調にのみ限られない。綠を帶びた紅紫黄白の綾錦と色に描けぬ色階とに春の空界を飾る。秋の紅葉の色さまゞなのと異るところはない。

綠の系統に屬するものゝ中でまづ色調を擧げて見れば濃綠・淡綠・中綠・淺綠・深綠、さては草色・萌黄（モエギ）色・青磁色・青竹色・鶸色・オリーブ色・苔色・松葉色・柳葉色・檜皮色・群青色・藍青色・瑠璃色・檳榔子色、さうしてそれらが相重なり、相反映して綠の色相を統一する。かくして色波は風のそよぐまに〳〵うねり行き、昨日の色調は今日、

今日の色合は明日、日一日と色の成長を見る。

次第に濃さを加へて新緑の進展して行くのが春より夏への自然の進行である。 啻に地上の若草のみでなく、林の梢にも、屋の棟の草にも、庭の樹の枝にも、清流の岸の小草にも、生々發展の美が認められる。

緑に次いで紅色の系統に屬するものゝ發芽も、決して少くない。自然生のものゝ中ではべにいたやかなめもちかつらあかゞし。やまざくらを最とし、すのこしろだもなんてんあをぎりしきみくすのきさかき等の常緑樹は多く淺紅色である。 私は初夏の大島を訪ひ、三原山麓に茂るしろだもが、艶々しい黄紅色の毛茸に包まれて、新生の悦に風と戯れて山路を被へるを見て、力強い更生の意氣を感じたことがあつた。

大島　伊豆七島の一

三原山　大島にある活火山

二月の花　車ヲ停メテ坐ニ愛ス楓林ノ晩霜葉ハ二月ノ花ヨリ紅ナリ（唐の杜牧）

秋の紅葉は二月の花よりも美しいと云ふが、秋の紅葉に比して遜色のない新緑期の紅葉を讃へる人が少いのは不思議である。

さうして春の紅葉美はやはり槭にとゞめをさす。 ちしほおほさかづきいちぎやうねんむらさめあかしだれあかぢのにしき等その數々の園藝變種は、可憐な葉芽を展べて時ならぬ錦の點景に庭園を裝うてくれる。

新緑は必ずしも葉にのみ表はれるものでない。 早春葉に先だつて開く樹花も亦一つの新緑美たるに背かない。

早春の花には黄色が多く、香に富んだものがすくない。 單純な色の多い春の自然と調和するのか、昆蟲の誘を求める必要がないのか、天の攝理はかうした點にまで注意深い創造を行つて來た。 春の花より夏の花が、寒地の花より熱帶の花が、北國の花よ

り南國の花が、より多く艶麗であるのも頷かれよう。黄色のものにさんしゆゆ・まんさく・らふばい・れんげう・わうばい等があり、早春の花として、自然に一刷毛はいた單色美を示してくれる。

五月雨は新緑美を强調するものとして我が氣象界になくてかなはぬ現象である、濡葉の濃さ、日ざしの美しさ、さうしてまた佗びしくも降りこめる靄のやうな雨の中に、新緑の最高潮期は到達するのである。（風景雜記）

七　戰時の巴里

島崎藤村
名は春樹
文學者

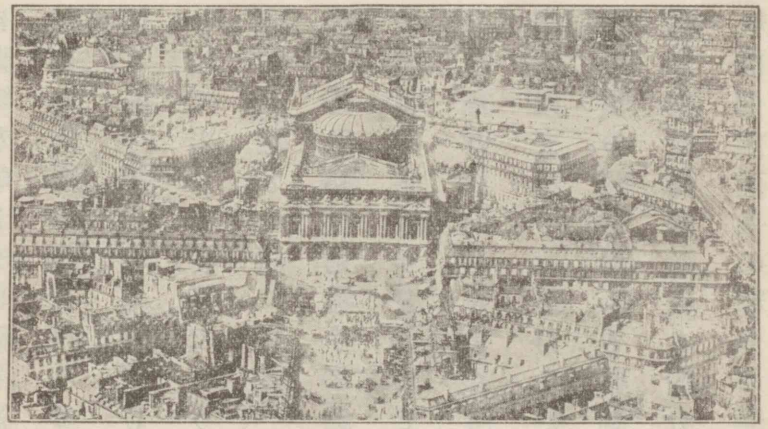
昨日は十七八歳ばかりの青年の一群に町で出遇ひました。それらの青年は皆學生でした。普通の服に革帶を締め、腕章を着け、脚絆を卷きつけ、銃を肩にし、列を作つて、兵式の訓練を受けるために公園の方へ行くのでした。中にはまだ若々しい聰明な面ざしのものをも見かけました。彼等はいづれ國難に赴かうとして居る若者達でせう。自分等のことにしたら、短い袴を着けて友達と一緒に學校へ通つて居た年頃だ。さう思つて、しばらく其の群を見送りながら立つて居ました。此の節は、青年期に達したばかりと見えて身體もまだ十分に發育して居ないやうな若い兵士をもよく町で見かけます。

開戰以來、はや七箇月を經ました。動員當時の混雜、市民の狼狽、あの頃の騷を思ふと、自制に自制を重ねて此の非常な時局に處して來た佛蘭西人も、隨分努めたものと言はねばなりません。私は佛蘭西人の精力の發現が寧ろさういふ方面にあるといふ

ジョッフル　歐洲戰爭に於ける聯合軍の總司令官　Joffre

ボルドー　佛國の西南部で西班牙に近く太平洋に面してゐる　Bordeaux

葡萄酒の本場　大正三年獨逸の戰鬪をさけて一時都をこゝに遷した



巴里市街

に躊躇しません。動員令が下ると共に大統領が巴里市民に與へた諭告は、徹頭徹尾市民に抑制を說勸めたものでした。ジョッフル將軍の公報は佛蘭西一流の多辯でなく、どこまでも謙遜に、所謂東洋的簡潔に書いてあります。昨年の八月以來、當地の新聞は殆ど戰爭の記事で埋めてゐる有樣ではありますが、ごく通俗を旨とした新聞にさへ、實際あまり挑發的な文字が用ひてありません。昨年の冬、巴里市民がボルド

ポアンカレー　佛國の首相　Poincare

ホテル　旅館　Hotel

エトワール　Etoile

エナージー　力　根氣　Energy

マチネー　特別興行　Matinee

ーから再びポアンカレー氏をこの都に迎へた時でさへ、町々は平日とかはりませんでした。日本の赤十字隊も無事當地へ着きました。佛蘭西政府の當局者はその病院に巴里第一流のホテルをあてゝ、紅い日の丸の旗をエトワールの凱旋門に近き好位置に飜させるほどの款待を盡しましたが、派手な歡迎騷などは、遠慮したやうです。見るもの聞くものがかういふ調子です。痛々しいほど沈んで、そしてしんみりとして居ます。戰爭が長引けば長引くだけ、ます〳〵私の身に感じて來たのは、この抑へに抑へようとして居るエナージーです、佛蘭西人の消極的な勇氣であります。

只今の巴里は、言はゞ留守の都です。佛蘭西政府もボルドーよりかへり、各劇場でもマチネーを興行するやうになり、寄席やコ

ーヒー店まで開かれて居ると言へば、以前と同じ巴里を想像させますが、其の實、巴里見物の爲に諸國から集つて來る多數の外國人を相手にした頃の歡樂の都ではありません。しかし純粹な巴里の味は今が却て味はれる樣です。羅馬舊敎的のしつとりとした空氣が其處にも此處にも溢れて居ます。劇の興行にしても、愛國的精神に富んだ出し物を選び、佛蘭西の古今の詩人の作つ

（左）シャヴァンヌ肖像
（中）ソルボンヌ大學
（右）同上講堂内の壁畫

ソルボンヌ大學 巴里市にある古い大學 Sorbonne 1225年頃創立

シャヴァンヌ Chavannes (1824—1898) 佛蘭西の歷史畫家

た多くの詩篇を名のある俳優が舞臺の上で朗吟し、最後に國歌を歌つて幕を閉ぢるといふしつとりとした行方です。ソルボンヌの大講堂は正面にシャヴァンヌの壁畫が描いてあり、半楕圓形の磨硝子の天井、昔風の建築、總べてが古雅で、心持好く出來て居りますが、毎週の日曜日には、そこで國民マチネーといふ恤兵的の音樂會がありません。佛蘭西の藝術家が祖國に對する事業として開催するのです。私も二度ほどその大講堂へ聽きに行つて見ました。有名な女優の獨唱があり、學士の朗讀があり、管絃樂の合奏があり、最後に一同で佛蘭西國歌を歌ひました。戰時らしい活氣は外部よりも內面に潛んで居て、却てさういふ音樂會などに溢れて居るやうに思はれました。（戰爭と巴里）

高山樗牛
名は林次郎
文藝批評家
文學博士
明治三十五年歿す

十國
伊豆相模武藏安房上總下總遠江駿河信濃甲斐

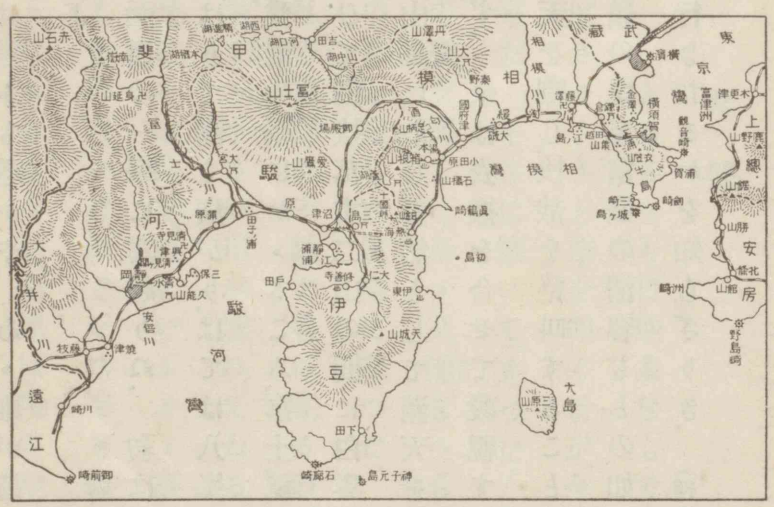
五島
大島神子元島三宅島等

嘲風
樗牛の親友姉崎正治
嘲風はその號

八　十國峠の眺望

高山樗牛

十國峠の登臨は記念すべき壯快なる遊なりき。この峠は函嶺より天城に連なる所謂富士火山脈の一峯にて、頂に登れば關の東西より豆州の沖かけて十國・五島を眺め得べしとぞいふなる。或日の空晴渡りたるに嘲風と此に遊びき。山の頂は熱海より五十町を出でざれば、いと高しとは言ひ難し。されど、豆・相二州に跨りて、北は足柄・箱根・富士、南は天城・神子より大島・三宅の山々を望み、西は江の浦・靜浦を眼下に見おろし、田子の浦づたひに、清見ケ關より三保の松原かけて、遙かに遠江の御前崎に至るまで、東は眞鶴ケ崎のあなた、小田原・國府津・小淘綾の磯邊に、江の島・鎌倉の山々より田越・三崎のはてに至るまで、相模灘を包みて、かす



かに安房・上總の遠巒を望む、景物の壯大、類ふべきものなし。殊に美はしきは、江の浦より清水に至るまでの田子の浦の景色なり。富士の裾野を縫へる小松原の濃き綠なるが、蒲原・興津わたり淺き紫に薄れ行けるさまなど、心ゆくばかり嬉しく、天津少女の天降りけん三保の松原の春霞にかすめるが、この世ならず見ゆるも、ゆかし。仰げば高き富士の峯の千古の姿

は、言ふも愚かや。あゝ、誰が造りなしけん。自然の姿の美しさよ。

函嶺の一峯に雲起りぬ。初は膚寸の大さなりしが、谷開け風加はりて、漸く廣がり、はては八峯の全部を掩ひて西の方に靡きぬ。愛鷹の峯にかゝるころ、富士颪に逆ひたるにや、雲行忽ち天に向ひて劒拔萬丈、二山の間に白雲の壁を築くよと見る内に、その頂山風に散じ、驀然として滿天を覆ひ來りて、四顧濛々、咫尺を辨へず。余は衣襟を合せて凝視すること多時。嘲風は杖を揮つて天を劃し、快哉を絶叫すること三たび。須臾にして空晴れて、函嶺の崔嵬、富嶽の清容もとの如し。滿天の雲霧、余、そのいづこに行きたるかを知らざりき。（樗牛全集）

横山桐郎
生物學者
農學博士

一茶
江戸時代後期の俳人
文政十年（一八二七）歿す

千駄ヶ谷
東京府豐多摩郡千駄ヶ谷町
東京市の西郊
明治神宮の近く

淀橋淨水場
東京市の水道の給水を淨化する池
新宿驛の近く

九螢

横山桐郎

とらるゝも口ゆゑならで螢かな。　一茶

ばさり〳〵と草を叩く音が、今夜も塀の向ふの川岸から響いて來た。それに續いて「光つた〳〵。」といふ甲高い聲が聞えた。その聲を聞くと、あゝ又捕まへられてやがて命をとられてしまふのかと、寂しい氣持になつた。

私の寓居は千駄ヶ谷に在るのだが、家の前栽の前の狹い道路を隔てゝ小さい川が流れてゐる。それは淀橋淨水場の捨て水を受ける水路で、川といふより寧ろ溝と言つた方がふさはしいかも知れないけれど、それでも幅は二間ばかりあつて、深さは一丈五尺もあらうか、兩岸は崖のやうに切り立ち、雜草や灌木が生ひ

繁り、一寸山間のやうな趣を備へて居る。

五月に入ると、此の川のほとりに僅かばかりの螢が出る。それはほんたうに僅かで、全體を集めても二百匹そこ〳〵位だらう。それが五月の半ばから、六月の初めにかけて出る螢の總數である。此の乏しい螢を附近の人たちは、日が暮れるのを待ち構へて捕まへに出る。螢狩といふと誠に風流だけれど、實は、たまに飛び出す一匹二匹の螢を、七人も八人もの人が奪ひ合ふのである。さながら澤山の狼が、たつた一匹の小羊を奪ひ合ふが如くである。そして結局は

奪ひ合うて踏みつぶしたる螢かな。　正己

の一句を現實に示すに過ぎない。

かうした悲劇が毎晩私の家の前で演ぜられるのだ。私は此の

あさましい光景を見るたびに、つく〳〵螢とる人たちの無風流と冷酷とを憎み、光故に美故にさなきだに短い命を更に縮められる此の蟲の薄倖を思はずには居られない。

そも「ほたる」といふ言葉が已に火に縁のあるもので、「ほたる」とは「火垂(ほた)る」又は「火照(ほて)る」等といふ意から出たのだといふ。支那では螢の事を「夜光」又は「夜照」「流火」「自照」などと稱へて居るが、これも皆火に縁のある名である。

では、螢といふ蟲は皆光を持つてゐるかといふに、決してさうではない。日本にも螢の種類は百種程もあるけれど、其の中で光を持つて居るのは十指を屈するにも足りない位で、他のものは、螢とは言へ光を持たないものばかりである。從つてさういふ螢は、昆蟲學者以外の人には全く顧みられないが、其の代り螢狩

の慘禍は免れてゐる。

そこで螢は日本と支那に限つたものかといふに、決してさうでない、汎く方々の國々に居るもので、殊に熱帶地方に居る螢は體も大きく、光は強く、優に燈火の代用になる。昔メキシコの海岸に海賊が横行して旅船を襲ふので困つた時に、旅船では、夜間燈火を消し、其の代り螢の光を用ひて海賊の難を避けたといふ。又同じくメキシコでは、土人が螢を首飾に使つたり又は手や足の先に螢を結び附けて夜道をすると

メキシコ　北亞米利加合衆國の南隣の國　Mexico

守山　滋賀縣野洲郡守山町野洲川の近く

車胤　支那の晉の代の學者油を買ふ錢がないので螢を囊に入れてその光で讀書をした

匡房　大江匡房平安時代の漢學者で歌人天永二年(一七一)薨ず

きの燈火の代りにしたとの事である。日本でも現在、近江の守山地方では、夜道をするには一本の杖を持つて出て、道々其の杖で草を叩き、其の都度光る螢の明りで道を見分けて行くことがあるさうだ。晉の車胤が螢の光を燈火の代用として勉強したのは有名な話である。

かやうに人々から持てはやされ、重寶がられる螢は、一體どうして出て來るものであらうかといふ段になると、大抵な人は默つてしまふ。そして例に依つて偶發説を信ずる者が多い。尤も螢が塵芥から涌くといふ事は昔から考へられて居た事で、

五月雨に草の庵は朽つれども、
螢となるぞうれしかりける。

とか

匡房

草が腐つて
季夏ノ月腐草螢
トナル（禮記）

どの草の螢になるか見て居たし。　竺齋

とかいふ歌や句がある。支那の學者なども草が腐つて螢となるものと思ひ込んで居たのである。しかし「蒔かぬ種は生えぬ」といふ諺の通り、螢も產む者がなければ生れるものではない。夏になると螢の親は川邊の水際の草の根本に黃色い芥子粒程の卵を產む。此の卵は夜になると親同樣に光を放つ。そして生れてから凡そ一箇月もたつと、中から薄黑い小さな蛆が生れる。此の蛆が卽ち螢の幼蟲で、やはり尾の先に發光器を持つて居て、何か刺戟を受けると强い光を出す。此の蛆は其の年は蛆のまゝで冬を越し、翌年の四月の末か五月の初めになると、水際の土の中に潛り込んで、其の邊で皮を脫いで蛹になる。ところが此の蛹も亦光るので、凡そ二週間もたつと愈、一匹前の螢になつて飛び出して來る。かやうに螢の一生はまづ一箇年であるが、親螢の壽命は先づ三週間內外である。

螢の一生は實に光である。若し螢から光を除けば一箇の醜い蟲として誰も顧みぬに違ひない。それは螢仲間でも光を持たないものは全く世に知られて居ないのでもわかる。光は螢の生命である。

重之
源重之
平安時代の歌人
長保二年（一〇〇〇）
卒す

音もせでおもひにもゆる螢こそ
鳴く蟲よりもあはれなりけれ。　重之

と歌はれるのも光故である。

さて螢の光はどんな役目をもつて居るのであらうかといふと、第一にお互同志の合圖、第二には敵を脅す事、そして第三には他の動物に向つて警戒の信號を與へる事である。

五月の闇を縫つて飛び交ふ螢の大部分は雄である。雌は大抵草や樹の葉に止つてじつとして居るが、その光はひとしほ強い。光る事は螢の生命ではあるが、彼等は一晩中光り通して居るわけではない。彼等が光り始めるのは大抵八時前後からで、それから夜が更けるに從つて段々と盛になり、十時十一時頃に至つて頂點に達する。しかし十二時過ぎて、一時二時になると、彼等も活動を停め、草や樹の葉裏にかくれ、光る事もやめて、靜かに眠に就く。大抵の人たちは夜半まで螢を追ひまはす事はしない、先づ九時か遲くとも十時頃には家に歸つて寢てしまふが、實はそれから後が螢の活動期なのである。彼の丈草の

呼ぶ聲は絶えて螢のさかりかな。

といふ一句はさすがによく螢の習性を看破したものである。

丈草　内藤林右衛門　江戸時代の俳人　芭蕉十哲の一人　元祿十七年(一三六四)寂す

狩螢　(筆一抱非酒)

エネルギー Energy

さて短い夏の夜も明けて、白い陽の光が川面を照らす頃、前夜螢を追ひ廻した川岸に立つて見ると、昨夜あれほど居た螢は何處へ行つたのか影も見えない。しかし其の邊の草や樹の葉の裏をかへして見ると、昨夜の元氣とかゞやかしさとに引きかへて、如何にも見榮のしない、いぢらしい螢の姿を見るであらう。實に白日の下に引き出された彼等は醜い一箇の蟲けらである。螢の光が美といふ點から見ていかにも優雅なことは説明するまでもない。しかしまた科學的見地からも貴重な光として學者の注意を惹いて居る。

螢の光は古來の謎である。それは光でありながら全く熱を伴はない。我々の力で作り得る最も進歩した光として考へられて居る電燈でも、非常な熱が伴ふ。エネルギーの大半は熱とな

つて消えてしまふのである。ところが螢の光の一回の熱は僅かに一度の四十萬分の一にも達しないといふ。しかも風に消えず水に滅せず實に理想的の光である。遺憾ながら人工では未だかゝる光を作ることは出來ない。しかし近來の研究によれば螢の光が一種の酸化作用であることは疑ふ餘地がなくなつた。今螢をとつて腹の所を肉眼で見たのでは、只淡黃色に見えるだけであるが、顯微鏡で檢すると、無數の細胞の集合で、其の周圍には澤山の氣管がからまつて居て、此の氣管に空氣が通ふ度に細胞内の物質が酸化燃燒して發光することがわかる。さうして其の物質といふのは一種の脂油であるといふ。螢は前にも述べた通り親も光り、幼蟲も光り、更に蛹も光を出す。して見れば螢の光は夏と言はず冬と言はず一年中絶えぬ光をもつてゐるわけである。それのみか、凡そ螢が地球上に現はれてから今日まで乃至將來とても螢が一匹殘らず地球上からその姿をかくす時が來ぬ限り、永遠に亙つて絶ゆることはない筈である。螢の光こそは永劫の光である。（蟲）

吉野作造
政治學者
法學博士
前東京帝國大學
教授

私の家

作者は宮城縣の生

一〇　家業の變遷

吉野作造

私の生れた頃、私の家は綿屋であつた。餘り裕福でもなかつたらしいが、それでも職人が十人餘も居た。朝から晩まで弓弦の音で家中がびん〳〵して居たから相當繁昌してゐたのであらう。しかしさう繁昌してゐたのは私の家ばかりではない。私の家よりも構の大きいもつと裕福な綿屋は外にも澤山あり、大小を合せ算へると戸數千たらずの小都會に二三十軒もあつて、

皆相當繁昌してゐた樣に思ふ。これほど田舍ではその頃綿屋營業といふものは大に榮えたものである。

私の記憶によると、原綿は仙臺から仕入れたやうだ。大阪產又は三河產と稱して琉球莚に包んだのが來る。後には唐綿といつて布包みの支那綿も來る樣になつた。これを職人が弓にかけ打ちほどいて賣出すのである。田舍の人はこれを買つて手車で絲に紡ぐ。染めるのは紺屋に賴むこともあるが、自分の家の藍甕に打込むのが普通だと聞いた。それから機に上せて木綿に織る。それを着物に仕立てる。かくして平民の常服は出來上るのであつた。私の家は商家であつたけれども、絲車もあり、藍甕もあり、機織臺もあつた。母が藍甕をいぢつて手を眞黑にしてゐるのを見たこともある。かうした狀況は明治二十年頃まで續いたと思ふ。

鐘ヶ淵紡績株式會社　本社は東京市外隅田町鐘ヶ淵にある

はつきりとは記憶せぬが、二十年頃から私の家の商賣は綿よりも盛に絲を賣るやうになつてゐた。仙臺の紡績會社の製品は餘り上等とされなかつたが、鐘ヶ淵の十六番手などいふのが隨分澤山賣れた樣だ。やがて英國製の細手も扱ふ樣になる。しかしいづれも白絲だけであつた。今から考へると、田舍の人は自分で絲を紡ぐことは段々とやめ、この頃は出來上つた絲を買つては染めて織るといふことになつたものらしい。但し綿は全く賣れなくなつたのではない。手車もまだ田舍に少しは殘つて居た。これで出來たのは地絲と稱して、寧ろ丈夫向きとして相當にはけ口はあつた樣である。それから間もなく私の家では商賣品の白絲をば田舍の人達に供給して白木綿に織りあ

げさせ、(工賃は絲で拂つたやうだ)これを紺屋に命じて色々の模様に染めあげ、更に種々の加工を施して手廣く近村の呉服店を通じて賣りだすことになつた。紺屋から反物が返つてくると、これに水霧を吹いては砧にかける。毎日數百反を取扱ふので家中大變な騒であつた。

これと同時に絲の方の商賣も少し趣が變つて來た。白絲は段段賣れなくなる。店にあるものは白木綿に織りだすための原料に過ぎぬ。田舎の人たちの買つていくのは專ら染絲に變つてしまつた。それも初めは紺と淺黄とであつて、何れも近村の紺屋で染めさせたのだが、後には染めたものを東京から取寄せることになつた。東京から取寄せるとなると、自然いろ〳〵の美しい色絲も入つて來て贅澤を敎へることになる。しかし同

時に東京から來る反物類の贅澤には到底及びもつかなかつた。しかしこの絲の商賣は惰性的に可なり永く續いてはゐたが、決して發展はしなかつた。つまりこの頃から田舎の人々は、自分の家で木綿を織ることも段々やめて、反物として出來たものを買ふやうになつたものらしい。從つて綿の方は中綿・蒲團綿としての需要のみで、絲に紡ぐ方はとんと賣れなくなる。そこで職工は昔の通り澤山は要らないので、大抵は木綿の仕上げの方に轉じたやうだ。田舎の人が、自分で絲を紡いだり染めたり織つたりする面倒を厭つた結果、私の家の商賣が右のやうに變つていつたのか、又は絲で賣つたり反物にして賣つた方が遙かに安いので、田舎の人が自然手仕事をやめたのか、その實際の順序は今私に分らない。たゞ今日からこれを憶ひだして見ると、封

建的生活の惰性的情態がこの頃になつて漸く完全に壞滅して
いく樣子が、あり〳〵と浮び出るのである。
反物供給時代が私の家の全盛期であつた。これが日清戰爭の
少し前になると段々衰へかけてくる。これより數年先き汽車
が私の鄕里の近くに通ずることになつた。その結果他所から
もつと安い反物がはひつてきた。越後の商人とかゞ私の家に
來て、頻に家兄と商談してゐるのを耳にしたことがある。これ
によると、今まで自分の家で作つて居たと同じものを、その商人
の手から仕入れると遙かに安いといふのである。最初はこれ
を買つて近村の需要に應じたらしい、しかしさういふ道が開け
ると、今まで私の家から供給を受けてゐた者はやがて皆直接に
原產地から買ふ樣になるのは當然だ。かくして私の家の商賣

賀茂眞淵
江戸中期の國學大家
荷田春滿に學ぶ
遠江の人
明和六年(一七六九)
歿す

はすつかり駄目になつた。反物ばかりでない、着物や蒲團に入
れる綿も東京邊から買つた方が安いといふことになる。かく
して三十年頃からは、私の家では全然弓弦の音を聞かなくなつ
た。少年時代における私の一家の通つて來た途は、ある意味に
於て日本人の經濟生活の一面の變遷を物語るものゝ樣にも思
はれるのである。（現代隨筆大觀）

一一　照る月影

賀茂眞淵

秋の夜のほがら〳〵と天の原、
照る月影に雁なきわたる。

田安宗武

田安宗武
德川吉宗の子
田安家の初代
眞淵を師とす
明和八年(二四三)
歿す

眞帆ひきてよせくる舟に月てれり、
樂しくぞあらん其の舟人は。

釋良寛
江戸後期の越後
の歌僧
天保二年(二四九)
寂す

飯乞ふとわが來しかども、春の野に
菫つみつゝ時を經にけり。

橘曙覽
江戸後期の福井
の歌人
明治元年歿す

樂みはあき米櫃に米いでき、
今一月はよしといふ時。

下河邊長流
江戸中期の國學
者
大和の人
貞享三年(二六六)
歿す

富士のねに登りて見れば、天地は
まだいくほどもわかれざりけり。

釋良寛　釋契沖　下河邊長流　橘曙覽

釋契沖
江戸中期の國學
大家
大阪の僧
長流の友
元祿十四年(二三六
一)寂す

梅の花おぼろ月夜ににほふなり、
常にもがもな、この頃にして。

荷田春滿

荷田春滿
江戸中期の國學
者
山城稻荷神社神
職
契沖の門人
元文六年(二三九)
歿す

ふみわけよ、大和にはあらぬ唐鳥の
あとを見るのみ人の道かは。

本居宣長

本居宣長
江戸中期の國學
大家
伊勢の人
眞淵の門人
享和元年(二四六一)
歿す

日ぐらしに見ても折りてもかざしても
あかぬさくらをなほいかにせん。

加藤千蔭

加藤千蔭
江戸の國學者
眞淵の門人
文化五年(二四六八)
歿す

すみだ川蓑きてくだすいかだしに、
かすむあしたの雨をこそ知れ。

村田春海

村田春海
江戸の國學者
眞淵の門人
文化八年(二四七)
歿す

小澤蘆庵
京都の歌人
享和元年(二四六)
歿す

香川景樹
京都の歌人
天保十四年(二五〇
三)歿す

清瀧川
山城國大堰川の
支流

佐々木信綱
國文學者
歌人
文學博士

雪降れば千里も近し、おばしまの
もとよりつゞく富士のしば山。　小澤蘆庵

波となり小舟となりて夕ぐれの
雲のすがたぞはては消えゆく。　香川景樹

筏おろす清瀧川のたぎつ瀬に
散りて流るゝ山吹の花。

一二　旅に出づる少女に

佐々木信綱

父君と共に旅行に御出につきて歌の上の心得をとの御手紙、よき御心づきと喜ばしく存じ候。旅心は最も歌心に相

ゲーテ
Johann Wolfgang Goethe
(1749—1832)
獨逸の
大詩人

通ふものにて候。古の人も、歌よまんが爲に旅に出で、旅すとては歌を詠じて思を馳せ申し候。旅は人の心を自然に向はしめ、思はざる自然の美、自然の靈感に心を新ならしむるものに候。かの詩聖ゲーテも伊太利に旅したる後詩眼頓に開けたりと傳へ申し候ごとく、旅は感動薄き習慣的の生活を脱して心を萬物全く新奇なる別天地に面せしむるものに候へば、未だ知らざりし自然の美、人工の巧を味得し深き感銘を受くるは尤もなる事と存じ候。

かつて、さる西洋詩人の短詩を讀み候ひし折、心とまり候句これあり、そは「旅行者が、歩み居る山や野や海邊に自ら感じたる詞を殘しおくことは、自らの記念碑をそこに建設することなり。」とやうの意味の句にこれあり候。されば御許の

此の度の旅行にも、汽車にせよ汽船にせよ徒歩にせよ、山を越え岬をめぐり川に沿ひ旅程を進めらるゝに隨ひて、移りゆく自然の印象をそのまゝ歌となし、山嶺に溪谷に峠に水邊に御許の旅の記念碑を建て置かるゝは、最も意義あることゝ存じ候。たとへば、ある濱邊の貝一つ、ある河原の小石一つ、ある山寺の庭の木の葉一ひらにても、その拾ひ來しものを數年の後に見出づる時は、そのかみの旅行なつかしく思ひ出でらるゝものに候。まして、自ら詠み出でし歌は、自らの爲に長く旅行の好記念として之にまさるものあらざるべくと存じ候。

しかして旅の印象のうち、殊に心とまり候ものをなるべく歌にせんと御つとめあるべく候。しかも唐土の人の語に

拙著
佐々木信綱著
「旅と歌と」

「詩材眼に滿てば却て詩無し」といふ句あり、詩歌の材料眼前に滿ち過ぎて却て詩歌なき場合、いはゆる景色に呑まれて歌の出來ぬ時もまゝあるものに候　さる時は、あながち其處にて直ちに詠み出でずとも、十分に觀察して、胸の中にその感銘を彫りつけおくがよろしく、さ候はゞ、後にいたりて更に反覆回顧して、その印象をよび起して歌にまとむる事も出來易きものに候。

旅と歌とのこの深き關係につきて夙くより興味を覺え候まゝ、かつてそれに關して公にしたる拙著これあり、一部御手許に差上ぐべく候間、車中に甲板上に、御披讀下され、旅中つれ〴〵の御伽ともなし下さらば幸に存じ候。先は御答まで。道中隨分御いたはりの上、御機嫌よく旅を終へらる

るやう祈り上げ候。（和歌に志す婦人の爲に）

一三　たしなみ

五十嵐力
國文學者
文學博士
早稲田大學文學部長

「たしなみ」といふ言葉を聞けば人品といふ事が思ひ浮ぶ。「嗜み」はおもひやりを意味し、人格の尊重を意味し、親切・自重・謙遜を意味する。例へば人の前で其の人の弱點を語るのは嗜みのない行爲である。盲人の前で眼の事を話し、跛の前で足の事を話すのは、いかにも心ない仕業であらう。單に不具の點ばかりではない、惡い方の人並でない事は、人に言はれるのを恥ぢるのが人情である。ナポレオン（Napoleon Bonaparte (1769—1821)　フランス皇帝）は脊の低いのを氣にかけて踵の高い靴を穿いた。シーザー（Caesar (前100—44)　ローマ共和國大政治家元帥）は禿頭を苦にして、薄い長い毛で禿げた部分を蔽つた。偉人でさへ其の通りならば、常人はましてであら

う。されば、身に引け目のある人の前では、其の引け目に關する言葉をば忌まねばならぬ。金貸の子の前で金錢の事を語り、老人の前で新時代めかした事を語り、寡婦の前で結婚を語り、婚禮の席で不吉を語り、病人の前で死亡を語り、落第者の前で試驗を語るなどは、嗜みのないわざで、皆人品の卑しい事を白狀するものである。貧人の前に美服を誇り、富者の前に野服を誇り、俗人の前に學識を誇り、愚かなる子を持つた親の前に我が子の賢きを語るは、嗜みの無い行爲である。他人の談話に口を挿み、他人の演說中に欠伸をするなども同じ類であらう。目下の者にも相當の敬語を用ひ、命令してよい事をも依賴するのを嗜みある行とするのも、此處から來て居る。アメリカでは、心ある者が、黑人の奴隸を、其の面前では召使と呼ぶといふ。我が國で他家の

下女を「お女中」といふのも同じ理由から來て居るのであらう。」

見識や自重も一つの嗜みである。富豪や高位の人の前でぺこぺこするのは見つともない。他家の下婢の行儀のよいのを見て下婢を褒める人は、主人の躾に感心する人に比べて餘程嗜みの低い人である。立聽や隙見や人の手紙を見たがる事や人羨みや食ひ意地の穢い事などは、皆自ら輕んずる不見識の行爲である。凡そ是等の行爲のある人は、位貴く學博く才高くとも、品格のある紳士淑女とは謂はれぬ。嗜みは人の趣味の美しく現はれてこれに接する者に好感を與へるものである、人に品格と床しさとを添へるもの、あらゆる智德才藝に貴き光澤をつけるものである。

人の言行に嗜みの必要があると同じく、文章にも嗜みの必要が

ある。而してあらゆる文章の中で嗜みの必要の最も多いのは手紙である。嗜みほど手紙に床しさを添へるものはない。嗜みがなければ美辭麗句も其の貴さを失つてしまふ。田舍の年寄に賴み事をするにハイカラな新熟語を用ひ、目上への金錢無心の手紙に「御貸し下さるべく候」といふ體たらくで、何の名句、何の美文があらう。目上には手落なく敬語を用ひ、目下をば憐み愛しむ態度に出で、金を借るならば、よしや相手は財產のある人でも、大きい家計であれば色々御都合もあらうが、出來るならば御用立が願ひたいといふ、譯のわかつた思ひやりのある心用ひをなし、他人の缺點は知らぬふりし、己れの越度は明らかに詫びるやうにし、萬事につけ自他の人格を重んじ、人をおもひやり自らへりくだる心掛があるならば、其の手紙には求めずして紳士

High coller ハイカラ

淑女の床しき品格が添うて來るに相違ない。

嗜みのあるのは床しい手紙、嗜みの無いのは卑しい手紙である。

（高等女子新作文）

鹽井雨江
名は正男
國文學者
奈良女子高等師範學校教授
大正二年歿す

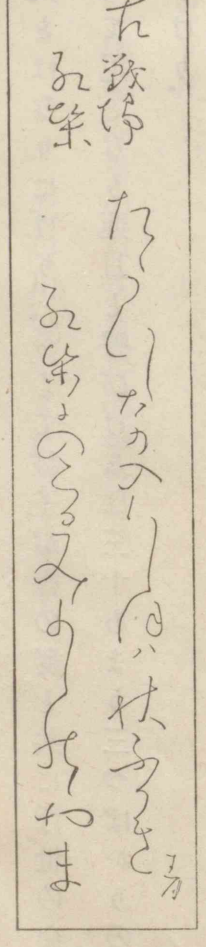
一四　蓮月尼

鹽井雨江

名を聞きてだにゆかしく清げなるを、まのあたり見し人に尋ね或はものゝ本に記せるを見るに、其の人、容色の美しきは、蓮の花の露に濡れたるがあしたの風に匂ひこぼるゝ如く、德操のめでたくすぐれたるは、望月のくまなき光のすみわたりたるがごとくなりけり。蓮月、名を誠子といひ、父を太田垣光古といひけり。家は代々因幡の鳥取といふ處にありけるが、父の代になりて京に出でて東山あたりに住みける。京の東山、名にしるき櫻の土地花はづかしき誠子は、此の名山の花の間に生れたり。

思へば名山何のえにしありけん、名花いかなるゆかりありけん。誠子の美しさは容色のみにあらず、心もまたあはれに美しかりけり。文もめでたく、歌にも堪能なりき。才藻のみにあらず、德行も亦世の常の女子に勝りて、父を敬ひ母にやさしうかしづきつゝ、親の訓の庭にたちならはしけり。母亡くなりてより、父も秋風に孤雁の聲かなしく、唯誠子を朝夕の力草としたりき。誠子も亦父のみの一柱をわが家わが身の頼み所としけるが、媒する人ありて、彦根の近藤某といふを夫に迎へけり。妻の道、子の

古戰場紅葉
たゝかひし太刀のちしほは秋ふかき
紅葉にのこるみよしののやま　蓮月



蓮月尼筆蹟

道にそむかじと思ふが朝夕の願にして、神に祈り佛に願ふも、書に問ひ歌にいふも、たゞ、これのみなりけり。誠子四人まで子を儲けけるが、この世の幸や薄かりけん、園の撫子秋を待たず皆枯れ盡し、はては何處何時までも離れじと思ふ軒のつまさへ、無常の風に誘はれて影をとゞめず、淺茅生が宿、また父とわれと唯二人とはなりにけり。かくて誠子が綠の髪と共に浮世の交を斷ちて尼となり蓮月と呼びけるは三十あまり三つばかりの時なりけり。

誠子が四十歳ばかりなりける頃、父も亦歸らぬ旅路に出で立ちぬ。

常ならぬ世はうきものとみつぐりの
一人のこりてものをこそおもへ。

たらちねの親のこひしきあまりには、
墓にねをのみなきくらしつゝ。

いかに嘆けどもさらぬ別のせん方なくて、岡崎といふ里にうつりて、風月を友として、世になき父母、わが夫、わが子をしのびて暮したりけり。

岡崎の里のねざめに聞ゆなり、
北白川のやまほとゝぎす。

冬畑の大根のくきに霜さえて、
あさとで寒し岡崎のさと。

父のありけるころより、家には貯とては無く、心は世外にあれど、さすがに此の世に在れば、たづきなくては叶はねば、自ら埴もてつくねておのが詠める歌を彫りたる茶瓶など造り出でて朝夕

の料としたりけるに、世にいたく珍重せられたりき。

蓮月の名は、歌に陶にかくれなくなりければ、世を捨果てんと思ふ身の、なか〳〵に世に交しげくなるをいたく思ひわびて、彼處に移り此處に住み、果ては北山の奥ふかき西賀茂のなにがし寺の茶室に引籠り居てまた出でざりき。この頃の閑居の作ならん。

露の身をたゞかりそめにおかんとて、
草ひきむすぶ山のしたかげ。

北まどの風にやれたるふるすだれ、
めもあはぬまで寒きよはかな。

うなゐ子が垣根に近くつめばこそ、
草のめでたき春も知らるれ。

いたく行ひすまして、明治八年十二月三日、八十ぢあまり五つにて、

願はくは後の蓮の花のうへに、
くもらぬ月を見るよしもがな。

と遺して空しうなりにき。

誠の心一つに孝悌の道をふみて遂に誠子の名に恥ぢず、德も才も姿も清くうるはしくて蓮月の名にそむかぬ世を通しけるこそあはれなりしか。（雨江全集）

瀧澤馬琴
江戸後期の小說家
江戸の人
嘉永元年（一八五八）歿す

蒲生修靜
名は君平
勤王家
宇都宮の人
文化十一年（一八八八）歿す

一五　蒲の花がたみ

瀧澤馬琴

蒲生修靜、山陵訪求の爲に京に赴きし時、彼の地に絶えて知る人なし。當時小澤蘆庵は古學を好みて、萬葉風の詠歌に名高く、世

をすねたる隱逸なりと、かねて傳へ聞きしかば、かれが助を借らばやとて、其の京に入りし日に、やがて蘆庵が宿所を尋ねたり。

小澤が家僕出迎へて、「いづこより。」と問ふ。言寄る由もなきまに、修靜まづ佯りて、「某は下野なる宇都宮のほとりにて、蒲生伊三郎と呼ばるゝものなり。琴をこのみ候へども、田舍には良き師なし。主人の翁は琴の妙手にておはするよし、東野のはてまでもかくれなし。これにより、御弟子にならまくほりして、はるゝ〳〵と來つるにて候。」といふ。

蒲生君平

東野
東國の下野國

其の僕心を得て奥に赴き、云々と告げにけん、蘆庵の聲と覺しくていと高く、「あな無益にも訪はるゝものかな。汝出でてしか答へよ。『主人は久しう客を辭して交を絶ちたれば、都の中にだに親しうものせるは稀なり。琴は若かりし時かき鳴したりけれど、あちこちの人に知られて、彼に聞かせよ此に教へよといはるるがうるさければ、近頃打擲きて薪に代へたり。かゝれば、所望に從ふべくもあらず。他に行きて求め給へ。』といへ」といふ聲の、襖一重を隔てゝぞ聞えける。

修靜、僕が云々といふをも待たず、更におし返して云ふ、「翁の御答はこゝにてつばらに漏聞きたり。某なほ一言あり。願はくは、枉げて聞き給へ。吾は下野なる儒者なり。しかゝの志願あれば、しば〳〵江戸に遊學し、こたみ都に上りしかど、相識れる者

絶えてなし。翁の古學を好み給ふと其の氣質の俗ならぬとは、かねて傳へ聞くものから、言寄るよしのなきまゝに、『琴を學ばんためにきたりつ。』とはいひしなり。こは長者を欺くに似たれども、其の虚言は已むことを得ざりし實情より出でたれば、許されて對面せられなば、肝膽を吐き志願を告げて翁の助を借らんと欲す。かくても意にかなはずば退けられんこと勿論たるべし。今一たびわどのを勞せん。この由取次ぎたまへ。」といふ。蘆庵これを漏れきゝて、「さりとは思ひがけざりき。そは奇しき客人なり。對面せずばくやしきことあらん。此方へと申せ。」とて、やがて面をあはせけり。

修靜深く歡びて、夙くより思ひ起せる志願の由を說き示し、山陵志著述のために、古き御陵を尋ねんとて、旅寢をしつる事の趣云

云と語り出でつるに、蘆庵も只管感歎して、「足下は得難き學士なり。さる志ならんには、吾が庵に杖を留めて、こゝらわたりの御陵を徐かに訪求したまへ。」とて、又他事もなくもてなしけり。

小澤蘆庵

これによりて、修靜は日毎に古陵を尋ね巡るに、ともすれば日暮れて歸るに、主人は自ら風爐を焚きて湯あみせさせければ、修靜、老人の心づかひ心苦しとて辭めども、從はず。「これらの事は只管に客を愛する故のみにあらず。吾も亦かゝる奇人に宿する事の歡ばしく、且は足下の疲勞を慰めて、國の爲に力を竭す人の助にな

らんとてなり。必ずいなみ給ふな。」とて、後々までもしかしてけり。

かゝりしほどに、修靜、ある夜、更闌けて、子二つの頃歸りしかども、蘆庵は寢ねず待ちて居り。例の如く湯あみせさせ、飯をすゝめて、さていふやう、「吾足下に宿せし日より、蔬菜の外に物もなく、させるもてなしはせざれども、夜は老僕をやすらはせんとて、手づから風爐さへ焚くを思ひ汲み給はずや。古陵を尋ね巡ればとて、今までは要なからんに、道草くうてか。老人に物を思はせ給ふこと、心得難し。」とつぶやきけり。

修靜聞きて、容を改め、「翁の恨、理なり。吾が非を飾るにあらねども、更闌けたるは聊か故あり。饑悔の爲に笑に供へん。けふはそれの天皇の御陵を尋ねたりしに、日の暮るゝまで尋ねもあはで、思はずも等持院なる尊氏の墓を見たり。こゝに至りて、年來の恨心頭に起りて堪へられず、墓に向ひて罵るやう、「梟臣尊氏、なほ靈あらば、今言ふことを確かに聞け。汝が一旦治りたる建武中興の世を亂して逆に取り逆に守りて毒を後世に流しゝより五百十數年、干戈をさまらず、國の舊典もこれが爲に燒け亡び、王室もまたこれに因りて卑しく、古帝世々の山陵すら迹なくなりて、吾らにさへあくまで物を思はするは、皆悉く汝が罪なり。天罰まさにおもひ知るべし。」とはらいゆるまで打ちのゝしりつゝかくて、寺門を出づる程に、物ほしうなりしかば、道のほとりの酒屋に立ちより、怒にまかせて飲むほどに、六七合盡したり。さて、酒屋を出でしかど、醉うて足も定まらず。このまゝにて歸り行かば、必ず翁に叱られん。なかば醒して行かんと思うて、株に尻を

等持院
山城國葛野郡衣笠村にある

かけしより、熟睡やしけん、時移りて駭き覺むれば更闌けたり。」と語る。

蘆庵ふきいだして、から〳〵とうちわらひ、「さても〳〵、世の中には似たる馬鹿者もあるものかな。われら亦往ぬる年ある日、靈山の邊に逍遙して長嘯子の墓をよぎりし時、流石に宿恨なきにあらねば、行きもえやらず、にらまへて、『長嘯子、不滅の罪あり。わぬしみづからこれを知るや。わぬしは豐太閤の外族とて位高く且采地も廣かるに、心ざま武士に似ず、伏見の籠城に敵の旗色を見て鬼胎を抱き鳥居元忠を捨殺にせしは不義なり。事平ぎて、罪を蒙り、わづかに命を助けられしを幸にして恥を知らず、心にもあらぬ世捨人がほして、えせ歌多く詠じたる、一盲衆盲を引きしより、歌の調わろくなりて今に至るまでなほらぬは、これ不

靈山　京都の東山にある
長嘯子　木下勝俊　慶安三年(一三二)歿す
鳥居元忠　德川家康の家臣　慶長五年伏見城で戰死した

滅の罪にあらずや。冥罰かくの如くならん。』と罵りながら、杖をあげて墓を毆かんとしたる事ありけり。こは能く似たるにあらずや。」と、語りもあへず、聞きも終へず、齊しく腹をかゝへたりとぞ。

（兎園小說）

本栖　富士五湖の中の最西方の湖　山梨縣西八代郡上九一色村にある
精進　富士五湖の一　本栖湖の東にある　同縣同郡同村
荻原井泉水　名は藤吉　俳人
五湖　本栖湖　精進湖　西湖　河口湖　山中湖

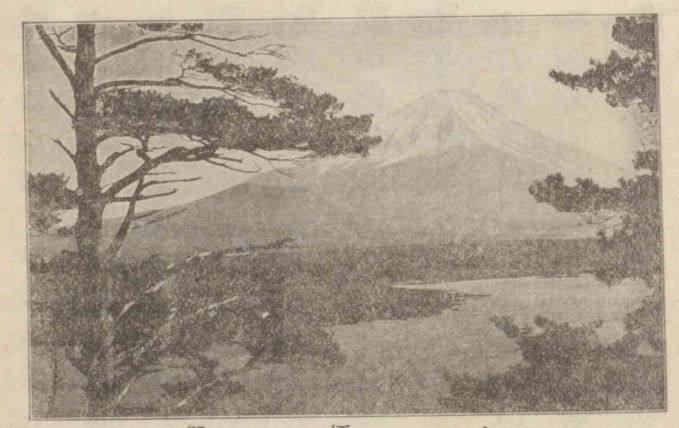
一六　本栖と精進

荻原井泉水

本栖に來て、初めて五湖の一つなる本栖湖の姿に接した。村にはひる少し手前から期待してゐたものゝ、桑畑の茂りの中から、ふつと廣々と展けた明るさに涼しい水の溢れてゐるのを見出した時は嬉しかつた。昨日から暑さの中に喘ぎながら旅してゐるのも、富士の陰に祕められてゐる五つの美しい湖を探る爲に外ならぬ、而して其の第一の湖に今しも出逢つたのだつた。

森田恒友
洋畫家
風景畫を善くす

私がかういふ山の湖に對して發したい嘆美の言葉は、既に森田恒友氏によつて語られてゐる。――「……高原の透明に輝く空の下に、丘又丘が這ひ續ける其の懷に、寂然として太古のやうに靜まり默した表情を現してゐます。彼は其の美しい鏡の面に毛むくじやらな丘の頭と、すんなりとした草の脚と、輕らかに眠る白雲の腹とを映して、限りない美しさだけれども、又恐しい笑顏を現してゐます。それは妖氣のある美しさです。不思議な魅力を以て私たちを捉へる美しさです……それが持つ魅力は、ぐるりに這ひ續ける丘や山勢、踞み伏す土、生ひ伸びる草の表情、水邊に生きる者共の生活のそれらが相俟つて我々を其の美しさに捉へようとするのです。」――私たちは本栖の村の茶店に荷物や吳茘などを置き捨てゝ、湖の水際まで下りて行つた。


本栖湖

水は空のやうに深くて、又空のやうに動かなかつた。たつた一艘の朽ちかけた舟が、漁る爲といふよりも渚で景色を眺めるものを休ませる爲であるかのやうに、そこに置かれてある。その舷へ私たちは腰をかけた。凡ての水といふ水は、どんな山中の湖でも小川となり大川となつて、いつかは海に自分を注ぎ込まうとする中に、此の湖は小さな流れ口をも持たない爲に、その生れた所に與へられたまゝの水を洩らす事なしに今日まで湛へてゐるのだ。さう思ふと、此の空の

やうに深く、空のやうに動かない水が永遠に純潔であり、又堪へ難く寂しいものに思はれた。私たちが默つて見てゐれば、湖はいつまでも默つてゐた、而して湖が餘りに默つてゐるので私たちも亦默つてゐた。しかし、それは重苦しい無言の行ではなくて、平靜な快い滿足であつた。譬へば、親しい二人の言葉が途切れた時、言葉は交さないけれども、二人の心と心とがぴつたりと融け合つてゐる其の氣持を味はつてゐるやうな甘さであつた。

私たちが湖の岸から村へ上つて來ると、茶店の前には賴んでおいた乘馬が三頭支度が出來たらしく並んでゐた。馬はどれもおとなしさうだつた。そして馬に乘り慣れない旅の人を乘せ慣れてゐるといふ風に、「あぶない事はありません。」といひかけるやうな人の好い目附きをして、靜かに背中を出してゐた。私と

外の二人とが先に乘つた。鐙に脚を張ると、身體の据りはぢきにきまつた。ぽつかり〳〵蹄の音につれて、ゆつたり〳〵身體の運ばれる調子は、心持をのんびりさせた。

路はこれまで來た草野とは違つた密林の中についてゐた。沈鬱な色をした針葉樹の青さと快活な色をした濶葉樹の綠とが入り交つた木立は、馬上の人の肩をする程身に近く茂つてゐた。蹄の音が谺をする程深くこんもりと茂つてゐた。そして再び明るい空の見える處に出た時、暫く眼界から隱れてゐた富士が、更に鮮かに立ち現れた。頂上に近く蔽つてゐた綿雲も、いつの間にかすつかり脫ぎ捨てられて、其の裾を埋める樹海まで隱す所なく露出した全身的な堂々たる體容は、神々しい程の威相をもつてゐた。そして丁度眞正面から照してゐる夕日が、これを

廣重
歌川廣重
江戸後期の浮世繪師
特に山水風景に長ず
安政五年（一八五八）歿す

繪畫的の匂やかな空氣を以て彩つてゐた。馬はとつぽり〳〵と靜かな――私たちに此の美しい景觀を心行くまで味はせるといふやうに靜かな――足どりを以て、私の身を快い高さに捧げつゝ歩んでゐた。

馬は誰にも初め案じたとは反對に乘り心地がよかつた。半分路まで來たといふ小さな峠の平で、私たち三人はおりて、今まで歩いて來た人と代つた。笠を着て吳蘆を背負つて馬に搖られて行く人の形は――そしてそれが大きな富士を背景にした圖は、廣重の繪などを見るやうなのがをかしかつた。路は又山の肌にぴつたりと沿ふ茂みの中に誘はれて行く。私は馬の人たちを先へやり過して、氣儘な歩調をとつた。葉の影は葉の影と重つて、あたりの綠は段々濃く濁つたやうに見え、もう日暮に近い睡たいやうな暗さが漂ひ始めた。それでも、私は急ぐでもなく、又句を考へるでもなく、うつとりしたやうに歩いてゐた。すると、山の一角が缺けて、そこから赤い夕陽の光が一筋、横ざまに鋭くさして來た。それが路傍の松の疎らな木立を透して向ふに紺碧の色の澄んだ一つの湖水を現出せしめた時、私は夢から目覺めたやうな鮮かな印象――否、急に夢の國へ連れて來られたやうな美しい幻想といつた方がいゝかも知れない――を感じた。それは精進湖であつた。

精進湖

ホテル Hotel

ページ Page

此の湖は打見た所でも小さいものであるが、その小さいといふ事が、如何にも山中の湖水らしい幽邃な趣であつた、而して周圍の山が深く急に迫つてゐる形も、此の水に或清楚な品位を與へてゐた。路は湖の西側に沿うて之を半周するやうについてゐるので、靜かに歩きながら眺めることが出來る。湖の對岸の山は皆赤松で、まともに射つける夕日が其の幹の一本一本をくつきりと描き出して其の強い色彩をそのまゝに水の面へ投影してゐた。湖のこちら側にはホテルがあつた。そのちんまりとした白い洋風の建物は、此の自然の中に點綴せられて、よく景色を活かしてゐた。ホテルの裏手の丘では西洋人が二人、女は純白の洋服を着て、男は日本の羽織を着て、湖の風に本のページを吹かせてゐるのも見えた。かうして一歩々々と歩いて行く毎

に湖の景色は色々に變化した。それは此の湖の沿岸が小さいながら屈折に富んでゐるので、視點を置く所の差によつて、山と水と近景の樹木との配合が樣々に移動して行くからであつた。少し前に其の傍を通つて來たホテルが舞臺の書割のやうに遠くなつて見えたり、對岸の山と山との間に拔きんでて居る富士が、動き動いて丁度いゝ形にはまつたりした。私はかういふ景色の動きが、丁度自分の好きと思ふ配置に置かれた時、そこに佇んで其の繪畫を心ゆくまで味はつた。しかしまた、馬で行つた者は、とうに宿に着いてゐるだらうと思ふと、湖畔の靜かな宿に私たちを待つ風呂の煙の立つてゐる樣も想像せられて、脚が急がれたりした。

精進の村はもう近かつた。先に行つた者が選んだ宿は、その軒

に馬が繋いであるのでそれとすぐにわかつた。浴衣に換へて窓に倚ると、湖水と私たちが來た路とが見渡された。そしてその路をさつきの馬子が歸つて行く。客をおろした後の馬にめい〳〵が跨つて、勢よく飛ばして行く、その三頭の馬が、湖水に沿うてだん〳〵小さく〳〵なつて見えた。

此の日は盆の十五日であつた、宿にも精靈棚がしつらへてあつたし、裏の山ではお盆の太鼓だとて踊の太鼓のやうな拍子を打續けてゐた。夜は月が佳かつた。以前、富士を下りた日も、盆の十五夜で、月が佳かつた。大宮まで疲れた脚を引きずりながら、「盆の月夜と鉦打てる町に泊らうを」と詠つた事を思ひ出した。早くから床に就いて、ランプを消すと、硝子戸を越して月は顔から胸の上までさし込んでゐた。湖の岸には村の青年たちが笛を吹いてゐると見えて、ひいろゝ〳〵といふ遠い其の音が快く私を夢に誘つてくれた。

（山水巡禮）

盆　七月十五日に行ふ佛事　色々の食物を精靈に供へる祭

大宮　靜岡縣富士郡大宮町　富士山の西南麓にある町

Lamp　石油燈

一七　九十九里濱

德富健次郎

濶さ一町餘、長さ十六里半の大きな砂濱は、人の子の生活の戰場で、同時に其の遊び場であります。風雨の中の舟の引揚げ、一時を爭ふ漁舟の乘出し、地曳の網の揚り際、男は赤裸、女は眞顏で曳曳聲を出す時は、自然を相手の戰爭といふ感が犇々と人を壓します。併し風雨が過ぎて二三日、右に大東、左に飯岡の岬も歷々と見えて、空青々と日麗らかに、心地好い程の南風がそよ吹いて、萬里一碧の海の笑顏に愛嬌ばかりの白波を立てる日は、向ふの方でながらめ貝を搔く男も、全くの赤裸で子供の風呂桶程ある

德富健次郎　文學者　號は蘆花　昭和二年歿す

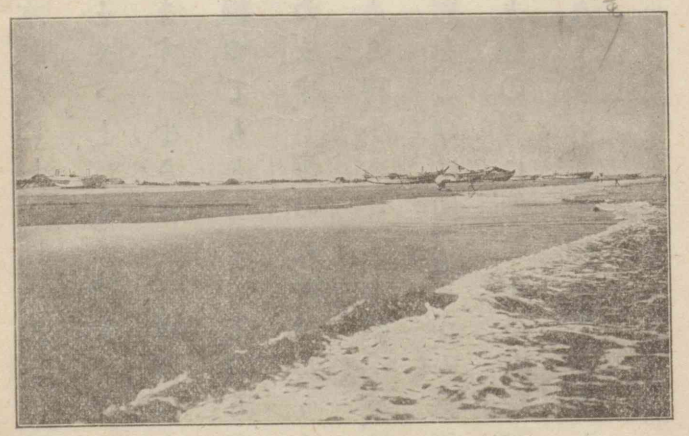
大東　大東ケ崎　千葉縣夷隅郡大東村にある岬

飯岡の岬　千葉縣海上郡飯岡町にある岬

飯櫃引寄せて立ちながら茶漬を食つてゐる赤銅作の仁王樣も、一張羅の晴着を汗にしまいとしてそれを風呂敷に包んで負つて紅い襦袢一つになつて波打際を行く田舍娘も、街道の砂埃に引換へてしつとりと彈力ある波打際の砂路を荷馬車挽かせて行く向鉢卷の男も、自轉車の小僧も、砂の上に坐つて日がな一日暢氣に網を繕つてゐる爺さんも、子供のおもちやに小蟹を捕らうとして懸命に兩手で穴を掘つてゐるかみさんも、人形の樣な兩手を擧げて家鴨の蹼の樣な兩足でよち〳〵走つて來る三歲の女兒も、其等を見てゐる私共も、鬼がゐない賽の河原の砂遊びをしてゐる一樣の子供としか思はれません。誠に人生は嚴肅であります、又快活であります。

此の砂濱は大きな畫布（カンヴアス）であります。色々の物が色々の物を描

きます。風が掃ひ、雨が流し、波が洗ふに任せてゐる此のカンヴアスの上に、勿論不朽とか無窮とかは許されません。しかし刹那の物にも人間の不朽よりめでたい物はあります。第一にめでたい波の手の跡を御覽なさい。波は活きてゐます。活きた波の手の跡に、波の氣分の顯れてゐないのは唯の一筆だつてありません。彼は好んで砂をしゞらに織ります、松皮模樣を描きます、鰐皮を作ります。朽木型、鉋をかけた玉目形。頗る意氣な綾や縞も彼の手作りです。大人の



九十九里濱

足跡、子供の足跡、轍の跡、馬の足跡。大きな梅花模樣は犬が行く行く描いたのです。不具な楓の三本趾、鳥にしては大胯なのは烏にちがひない。ひよい〳〵〳〵とやゝしばらく續いて、何かに驚いてぱつと飛立つたげであります。小さな〳〵模樣の小刻みに右につゞいて左に折れ、また飜つてもとへ戻つて居るのは、千鳥か何ぞの心の曲折を語つてゐます。蟹の足跡がありまつぱと描いたやうな纖い〳〵半月形を、これは何だらう、一體何が描いたのだらうと、よく見て居ると、龍の鬚に似た小さな草がそ知らぬ顔して、「私ぢやありません。」と纖い首を掉つてゐました。

九十九里に往つた最初は七月といつてもしけがちで、此の大きな海を前に控へながら、毎日豆腐や、粕谷から持參の甘藍豌豆、伊香保の干蕨の類ばかり食つてゐる日が續きました。その内二週間も經つと、七月も半ばになつて、鰺の地曳網が始りました。私共の歸る頃は鰺も大きく、味も大分よくなつてゐました。朝暗い中から拍子木が鳴ります。それは地曳の始る知らせです。私が浴衣一枚で海浴に往く頃は大抵もう曳き始めてゐました。よく風いだ朝などは、地曳の組が、幾組も〳〵南に北に並んでゐます。霧の中に小さく見える組、もう眼に入らぬ遙かな遙かな組もあります。なるほど九十九里は大きな濱です。腰と踵に力を入れて、急がず休まず永劫につゞくかのやうにじわじわ曳くのも、見てゐて力が入るものですが、網の目標の浮樽が見えて來てから活氣はまた見物であります。小一町も離

粕谷
東京府北多摩郡千歳村の大字
作者の居住地
伊香保
群馬縣群馬郡伊香保町

れて曳いてゐた南北二列の曳子が、追々近寄つて來たかと思ふと、一方の列が綱を抱へながら、えつさ〳〵と他の一列の方へ駈寄ります。鉢卷の赤裸男がざんぶと海に飛込んで綱元へ廻ります。棒手振が寄つて來ます。やつさ籠が幾つも〳〵並べられます。波打際では、其方曳け、此方しぼれと、綱主が罵りわめいてゐます。私共も砂の上から立上つて、そろ〳〵波打際へ向ひます。もう綱は盡きて、繩綱が見えて來ました。其の或ものは向鉢卷、雙肌脫ぎのいゝ加減な婆さん、かみさん、娘までがざぶざぶ海に飛込んでいつて、件の繩綱を攫んで、一抑一揚、歌で拍子を取りながら引張ります。名物の地曳歌はこれです。中でも年配の女が金切聲で音頭を取ります。皆がつゞいて囃します。彼一句此一句、歌つては曳き、曳いては歌ふ。抑へて揚げて、かゞ

んで、伸びて、右の片足をひよいと上げて、拍子も調子も面白く、綱は段々上つて來る。一樣な節の間間に「何とか何とかやあい」と一齊に囃す時の面白さ。もう綱が見えて來ました。綱の繼目を全速力で解く。海に潛つて綱の囊をしぼる。眞裸の綱主が咽喉も裂けよとわめく。一切の男女はぐるりと綱に取りつき、「何とか何する、何とかかせい、何とか何とかやあい」をやはり歌ひ續けながら、綱を手繰つては撥ね、しぼつては撥ね、段々囊の底へ魚を寄せて行きます。子供が擔綱

地曳綱

を持つてたかります。もう網の中は、さつきから鰺や鯖の青光り白光りが、ばた〳〵ばた〳〵、ごつたがへしてゐます。鰺の千五六百ははひるやつさ籠が持つて來られて、一杯になると、向鉢卷、雙肌脱ぎの女たちが二人で籠の縁を攫んで、「やつさ〳〵」で濱へ持つて行きます。どうと置くこともあり、ひつくりかへすこともあります。いやもう盛なことです。

地曳通ひは私共の日課でした。私はかく自ら嘲りました。

地曳すればわれも鷗と飛んで來つ、
魚獲んとして去りがてにする。

拍子木が鳴るといそ〳〵飛んで濱に行き、獲物を手に入れるまではうろついて立去らぬ私は、魚欲しさうに地曳網の中を往つたり來たりするあの鷗や、みさごや、かいつぶりさんたちに似寄つたものでした。（新春）

吉江孤雁
名は喬松
佛文學者
早稲田大學教授

一八　赤道をこえて

吉江孤雁

船の上は全く自由な一つの國である。新聞もなく郵便も來ず、各種の人種が集つて作り出す、地上の拘束を脱れた一つの自由の團體でなければならない、生死を共にする、差別を撤した國でなければならない。闇の海上を檣燈を揭げて走る船を遠くから眺めやつた時には、殊にさういふ感じがする。彼處に一團の人々の生命が走つて行く、彼等は運命を共にしてゐる人々であるといふ感じが、強くする。從つて闇の海上で行きちがふ船に出逢つた時は、言ひ知れぬ懷かしさを覺える。檣燈を上下して挨拶を交はすのも心からの親しさを示してゐる。渺茫たる水

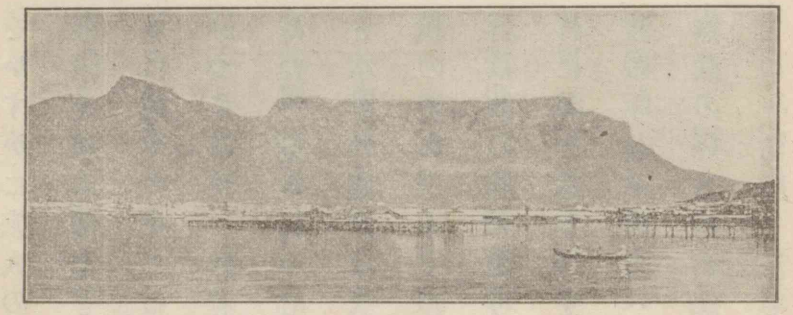
コロンボ　セイロン島の首府で港　Colombo
マダガスカル　南アフリカの東インド洋にある島　Madagascar
ナタール　南アフリカの英國植民地の一　Natal
ケープタウン　ケープコロニーの北東　Cape Town
テーブル山　ケープタウンの裏手にある山　Table Mountain

の領土、果てしない闇の中を互に分けて行く旅人の感じは、人間そのものゝ姿を互に見るやうな氣のするものである。

私たちの船は、この洋上の旅を七十五日も續けて行つた。コロンボから赤道を南へ、南極星の波に浮ぶのを眺めて、マダガスカルの沖を經過してナタールの港に寄り、更にケープ・タウンへ碇泊した。日本の秋の眞中を、此處では晩春であつた。テーブル山をめぐらす裾野には、百花が咲き亂れてゐた、銀葉樹の葉が日に閃めいて明るい天地を開展し、鳩と孔雀の鳴き聲が樫の林にひゞき、セシル・ローズの記念像は山の中腹に、印度洋と大西洋の打ち合ひ寄せ返す波濤を眺め下して立つてゐた。

テーブル山の頂に雲がかゝつて、山下の市街に火が美しく輝きだした頃、花の香が高く夕方の空氣を匂はせて、海からの風は全

セシル・ローズ　Cecill Rhodes (1853—1902)　南アフリカの政治家



ケープタウン

市を包む。おそらく、この市街を故郷に持ち、南極星を仰いで人となつた人に對しては、世界の何處へ行つても望郷の思に堪へざらしむるであらうほどの美しさをこの市は持つてゐる。

私たちの船は、この美しい市街を去つてこの晩春の花園を捨てゝ、再び北へ、苦熱の海へ、常住の夏の國へ向つた。再び來まいと思はれる土地を去る一種の哀寂の情が胸をめぐつて、甲板の上から仰ぐテーブル山の頂には、今朝もまた白い雲がたなびいて、名殘を惜む靈のやうに、南アフリカの絶端

をかすかに旅人の胸に刻みつけた。

故國を思ふ情などはもはや消えてゐた。それを思ふにはあまりに遠くへ來てゐた。またそれを思ふにはあまりに風物がちがつてゐた。熱と光と水とが晝夜を分たず我々をとりまいてゐた。刻々に中心をかへて、幾重にもたゝなはつて行く、この空と水との圓形は大西洋上に無限に描き出された。

秋の野にゆらぐ草花のやうに、はかなくも寂しき波の花、飛魚の群は、波の間に躍りつ、飛びつ、光を亂し、暑さを侵し、水面とすれずれに陣を布き、列を整へ、銀光を空中に放散しては、また緩やかな波のうねりの頂へと突入した。

無數のいるかが船の兩側を、船足と競爭するやうに、空中に轉回しつゝ、曲藝を演じつゝ、波の面の色を暗黑にして、群をなして泳

ダカー Dakar 北アフリカのセネガルの港

ぎまはつた。赤道をふたゝび北へ越えて行く船は、無風帶を通過して、默々たる歩みを急速につゞけて行つた。幾日たち、幾夜を經過したかさへも忘却してしまつて、たゞ同じ日を、同じ光景を、單調な光の國を、ひたすら走つて行つた。

アフリカ大陸の西端の一角へ船は二日間碇泊した。そこは熱砂つゞきの大陸が、わづかに草原と矮林とに覆はれて、海に盡くる一角である。大地は老いて生氣がなく、人も老いてたゞ殺伐な氣風を見せてゐた。このダカーの港の或カフェで私は、はしなくもいかにも賢さうな一人の東洋少年を見た。

「どうも日本人らしい。」と、同行の一人が言つた。「日本人だとすれば、どうしてこんな土地へ來てゐるのだらうか。」私たちは不審に思つた。

「君は日本人かね。」と最初英語できいて見ると、その子は、たゞ笑つてゐる。フランス語で更にきいて見た。「いゝえ」とその子は答へた。「では支那人かね。」と、かさねてきくと、「いや安南人です。」といつた。

いかにも賢さうなこの安南人は、客の間を敏捷に身をすり抜けて、彼方此方と茶やカフェを持ちはこんでゐた。そして、時々私たちの方を振返つては微笑を見せてゐた。如何にして東洋からこんな土地へ來てゐるのか、何時になつたならば故郷へ歸られるのか知らないが、この小さな亞細亞人は、黑人や白人の間をいかにもさかしげに飛び廻つてゐた。

船はまたこの老大陸と小さな亞細亞人とを見捨てゝ、更に北の方へと進路をつゞけた。こゝでは既に夏が去つて、直ちに初冬

カナリー群島 Canary Islands　北アフリカの西にある諸島

ジブラルタル Gibraltar　西班牙とモロッコとの間にある海峽

ビスケー灣 Bay of Biscay　西班牙の北佛蘭西の西にある西北向きの灣

の氣候が我々の船を包んだ。霧が刻々に北方から、水平線上に陸地か山影かと思はれる迷景を浮ばせて、掩殺するやうに迫つて來た。それが忽ちにして我々の船を包んで濛々たる暗黑の天地にしてしまふ。何たる變化であらう。カナリー群島を過ぎ、ジブラルタルの沖を經て、いよ〳〵ビスケー灣へさしかゝつて來る頃から、初冬の大西洋は荒れはじめた。

冷たい波は、海の怪物を思はせるやうに、船の舷側へ奇怪な手を懸け、頭を擡げ、時には上から覆ひかゝり、時には船底から高くさげ、狂ひまはり、まろび、走り、その度毎に、船をば玩弄物として思のまゝに扱ひ、日夜疲れも見せず、時には遠くから吠えるやうに駈け寄つて來て船に近寄ると、俄かに飛沫になつて四方から船中へ飛び込み、時には更に遠く引いて、水平線上に白い泡を立て

て、包圍攻擊でもしてゐるやうな勢を示しだした。

長旅に疲れた船は、この波の襲擊に逢つて更に疲れ果て、英國海峽へはひりかけた頃には、萬里の懸軍から歸つて來た老武者のやうになつてゐた。（自然の寂光）

アルプ　歐洲第一の山系
Alp
槇有恆　登山家

一九　アルプの夏

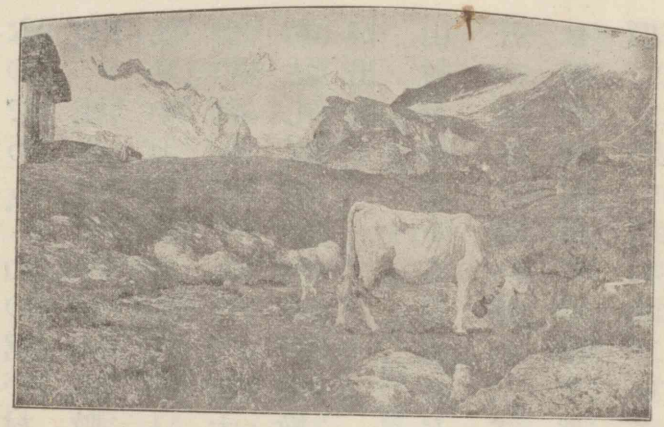
槇有恆

初夏の滴る喜を心行くばかりに吸はうとするならば、アルプまで登らなければならない。アルプは見果てのつかぬお花畑の夢幻郷だ。足の踏み所もない程に咲く草花に身を横たへて雪山を仰いでゐると、森ばたに栗鼠が音を立てゝゐる。誠實な生活のかはいらしい音だ。牛の群がまた登つて來る。アルプの草を追うて村から來るのである。一體アルプと云ふ語は土地の人たちには夏期に放牧する雪線以下の山麓を意味するものなのである。山の裾の村人は、生活の必要物として牛や羊を持つ。主として牛が大多數を占めてゐるが、數多く持つてゐる者もあれば又少ないものもある。何れにしても彼等は晩春から雪の降りだす九月下旬、大抵九月廿九日のサンミカエル祭を最終として、各自所有の頭數だけ此のアルプに牛を放牧することが出來る。

サンミカエル　Michaelmas Day　九月二十九日に行はれるローマ教會の一大祭

山村が積雪から自由になつて、山麓にも若萌えが芽ざす五月の下旬、長らく待ち焦れたアルプ行の日が來る。其の日には牧夫は黑の天鵞絨に赤緣を取つたチョッキに、皮の帽子を被つて先頭に立つ。次に山羊が二匹位、その後に年長の牛が大鈴を頸に下げて續く。此の鈴は農夫が家寶として誇るものであつて、古

いものになると中世紀以來のものがある。大きいものは直徑七八寸もあるのがあつて、眞鍮製が多い。外側にはエーデルヴァイスの浮彫などがあつて、愛すべき風韻を具へてゐる。それを幅の七八寸もある厚い皮の帶に下げて牛の頸に懸ける。此の先達牛の後に、十頭も二十頭も牛が續く。かくて此の頃になると、村の道は毎日此の牛連れの行列に絶え間なく、鈴の音が朝まだきから響き渡る。そして牧夫や牧童が紐の長い鞭を高く空に鳴らして、道草を食ふ牛どもを



アルプの放牧

リュックザック　獨逸語で背嚢の義　登山に用ひる雜嚢　Rücksack

アルペンローゼ　Alpenrose

促して登つて行く。

青い空を戴き、雪の連峯を前にお花畑の上に、歌つたり想つたりしてゐることの美しき時よ。谷よりそよぐ風は遙かなる牧童の歌を夢幻の中に送り、山々は險しき面持をもて胸深く刺す。何と云ふ莊嚴な造化の神祕であらう。

六月も半ばを過ぎて、アルプを渡る風の烈しさも柔らいで來る時、峠の茶屋や展望の山のホテルなどが一齊に戸を開き、竈の煙を上げて、訪ふ人を待つ。登山鐵道も山麓の傾斜面を這ひ出して上下する。リュックザックを擔つた男女の群がアルペンローゼを帽や胸にかざして峠から峠へと歌つてあるく。皆强い高山の氣に打たれて腕も顏も赭い。アルペンローゼに二種類あるが、何れも赤花の小花石楠花である。兩者は殆ど同じやう

であるが、一方の葉は綠が若く、毛を持つてゐて、花が早く咲く。雪の高峯の裾に荒々しい斷崖の端のあたり、群がり咲く此の可憐な花の姿はまことに詩に歌に詠まるべき美しい姫君である。しかもローゼとは云ひながら、刺す刺も無ければ平地の人に狎れて養はれる媚も持たぬ。何時も胸深く悲みを祕めてゐる。そして人の世に植ゑかへられると、愛撫の日をも喜ばず、異鄕の土に故鄕の山を想う

アルプの尖峰マツターホルン

ティロール　オーストリヤの最西部の州の名　東アルプ一帶の地方　Tirol

フェーン　魔神　Feen

て焦れ死にゝ死んでしまふ。たゞ山にある日のみ彼の花に幸は深く、穢なき大氣を吸うて美はしき面をかざしてゐる。櫻かざして若人の幸を歌うた昔もなつかしいが、ティロール帽に差した一枝のアルペンローゼに、命の喜を思うて山路歩むのも樂しい。

日影が北面の峯から全く逃れて谷一面に朝から照りつけるやうになれば、牧草も林も新綠が燃えるやうな瑞々しさになる。天鵞絨のやうにアルプを蔽ふ牧場の綠に見入つてゐる日は限なく麗はしい。何處を見ても荒廢の跡がない。滴るやうな若さだ。しかし黃金の光の雨降る日のみではない。地上が餘りに甘い喜に浸る時は、自然は必ず肩を聳て聲を怒らして威嚴を示す。フェーンの疾風に乘つた雲の群が、峯に溢れて狂ひ叫ぶ

時は我等は命懸けだ。たゞ其の狂暴な意志の奔放を小さくなつて見守つてゐるより仕方がない。

しかし夏の間に山村を一しきり搖がして忘れたやうに行き過ぎる驟雨は倦怠を掃ひ去つてくれる。

アルプ登山の姿

夕立雲が前山の頂に涌き上つたかと思ふ間に、雪の山にあたつて卷きかへる。今まで陽氣であつた谷も光を失うて、空の御機嫌を伺つてゐるやうだ。その内に恐しく強い雷鳴が、峯から峯へ、崖から崖へと縱横に駈け廻つて轟く。豪雨だ、見る間に雲の下に露はれた崖に大きな瀑布が幾筋もしぶきを飛ばしてどう〳〵と落下する。山おろしの風が颯々と唐檜の森や村の上を渡る頃は、雨しぶきも薄らいで、雷鳴は氷河の奥の方で迷つてゐる。谷には霧が昇騰し始める。小鳥が待ち兼ねたやうに囀る。驟雨は過ぎたのだ。雲の間から日光が矢のやうに射て牧場を照す。緑の焰だ。瀑布も細れて跡がまた消える。農家からは紫煙がゆる〳〵昇る。忠實な妻女が夫や子供の夕食の支度をしてゐるのであらう。雨後の空氣は十分に濕氣を含んで柔かい。しかも爽やかな芳氣が溢れる。若芽の香、靜寂な森のする呼吸、はち切れさうな土の誘惑、そのエーテヤの中を美しい小鳥の聲と牛の鈴の音が天使の歌の如く舞ふ。

日が西の山に沒した。川霧が立ち昇つて何處よりとも無く集

エーテヤ
Äther
氣

メランコリヤ
Melancholia
憂鬱症

幸田露伴
名は成行
文學者
文學博士

り、森の上にたなびく。谷と村とには靜かな暮の藍色が濃くなつて行く。その時である、頂と云ふ頂は悉く日を浴みて赫々と燃えてゐる。焰なき熱なき火だ。目が覺めるやうな透明な赤だ。微動すらしない沈み切つた色だ。その赤が次第に下から昇る紫に追はれて行く。そして紫より藍へと移つて遂には頂の一點のみが映える。喜より沈思に、そして遂にメランコリヤに移るのが山の夕映である。（山行）

二〇　樂地

幸田露伴

如何なる處にも樂しき處はあるべし。又、如何なる處にも樂しからぬ處はあるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天長閑に霞み、水緩やかに流るゝ春の日に當りても、心よき事のみ懷に滿つべくはあらず。

朝の曇には雨を疑ひ、夕の風には寒に怯ゆることもある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色なく、人畜共に萎え屈む冬の時に當りても、うらがなしき事のみの胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に清き優しさを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣を覺え、木の根焚く山家の爐のほとりに罪なき話の興を涌かし、ぬく灰はたく熄芋の煖きに笑むをかし。さもあるべし。金殿・玉樓にも樂しからぬ折はあるべく、茅店・草屋にも樂しき處はあるべし。

此の世は我一人のために設けとゝのへられたるものにあらず。されば、親としては我が子をも飽かず思ふことあり、子としては我が親をも物足らず思ふことあり、人を使ひては齒痒くもどかしく思ひ、人に使はれては腹だたしく不滿・不快に思ふことある

も、免れ難き世の習なり。まして、身貧しく學乏しく、よろづ心に任せぬ者などに在りては、いつも口惜しく、あぢきなく、樂しからず思ひて、「我が如く苦しき目をのみ見て生きながらふる者もあらじ。」など、身をも棄てはてんほどまでに、或は恨み、或は嗔り、或は憂へ悲しむこともおのづからあるべし。されど、其の人より言へば、窮苦の底の底に沈みて、右へも左へも行くべき道のなきやうなれども、他の人より言へば、かう〳〵したらんにはよかるべきものをと思ひ、或はまた少しは樂しきかたもなきにはあらざるやう思ひ做さるゝこともあるべし。

事物は大凡只一向ならぬものなれば、樂しからぬものなれば、樂しからぬが中にも、樂しき處、樂しむべき處もあるべければ、樂しき處、樂しむべき處を見出し得ば、如何ほど窮苦・不快の中に在りとも人は自ら勇氣を得て、苦中の苦に堪へ、やがて人上の人となり得ることもあるべし。

碓氷
群馬縣碓氷郡と長野縣北佐久郡との交界
海拔三一三五尺

さなくとも、樂しからぬがなかに樂しき地を見出さんことを心がけて、其の習慣を我が身につくる時は、朝夕に心も潤く氣も裕かになりて、おのづから人品も宜しくなり、分別も正しくなり、世をば樂しく過すやうにもなるべし。されば、人は務めて樂地を見出す習慣を身に賦せんと心がくべし。

むかし、或江州の行商人と、他國の行商人と共に碓氷の坂路を登り行きける折、夏の日の燬くが如く熱きに、商ふ品嵩高にて且重かりければ、二人とも憊れ苦しみて憩ひけるが、苦しさの餘りに、江州のならぬ商人、「碓氷の山の今少し低くもあれかし。身すぎの道に苦しからぬはなけれど、かばかり高く峻しくては、行商を廢めて歸り去らんとしも思ふなり。」と溜息つきて歎じけるに、江

州の商人打笑ひて、「坂も同じ坂なり、荷も同じ程なれば、御身の苦しむほどは我もまた苦しみて、かく息も喘ぎ、汗も流るゝなり。されども、我は然おもはず。此の碓氷の山を十程も重ねたる高き山もあれかし。さらば、數多き行商人は、皆半途より身も憊れ心も弱りて歸り去るべし。其の時、我一人如何にしても山の彼方に到り、思ふがまゝに商賣して見んとは思ふなり。碓氷の山の高からぬこそ口惜しけれ。」と云へりとなり。同じ艱苦の中に在りても、よく樂地を觀るものは、身撓んで、心撓まず、力衰へて勇衰へず。一路兩人、一境兩狀。よく〳〵思ひ味はふべきなり。

（洗心錄）

二一　黑井繁乃

信藏　海軍大將黑井悌次郎の父

年若き女の身にして夫に後るゝばかり悲しきはあらざるべし。しかも此の悲みに堪ふるものはなほ世にあらん。鐵石の貞心、身を終ふるまで之を潔うする者に至りては更に難かるべし。さるをよく之を全うして、貧苦に撓まず艱難に挫けず、幼き孤兒をおふしたてゝ、家系のまさに絶えなんとするを繼がしめし黑井繁乃の如きは、最も類まれなるべきなり。

繁乃は上杉氏の家臣黑井四郎左衞門の一人娘にして、文化元年七月出羽國米澤なる袋町に生れき。七歳にして、父を喪ひしかば、母の膝下に人となり、後、同藩士湯野川某の三男なる源三郎を夫に迎へて家を嗣ぎぬ。文政六年七月、一子信藏を生みて家門の榮えいよゝまさらんとしけるに、げに禍福は糾へる繩の如く、同じき年の十一月、夫源三郎病の床に打臥しけるが、やう〳〵重

りゆきて、心こめたる看護のかひもなく、遂に歸らぬ旅にぞ出で立ちける。繁乃は其の時纔かに廿歳、よはひ一つの嬰兒を育むだにあるを、これに加へて頽齡の母はあり、ことに家主人の二代まで引續きて世を早うしければ、おのづから食祿も減らされて、世の活計に事缺くことの多かりけるには、いかばかりわびしくも亦悲しかりけん。世の常の女なりせば物狂はしうもなりぬべし。さるを繁乃は心を鎭めて、よくこの歎きに堪へ、あるは羽織の緒を組みて町に賣り、あるは機織り絲繰りなどして、わづかの賃銀に換へ、よく母に事へ子をいつくしむこと年かさなりければ、遠近の人々、こを聞き傳へて、ほめ感ぜぬものこそなかりけれ。

信藏、七歳のほど、繁乃、隣なる糟谷某といふ翁に就きて四書を學

ばしめき。されど其の頃の藩士の女のならひとて面正しき學の道にも入り立たず、たゞ纔かに假名文字知れるばかりなるを恥ぢて思へるやう、「子を賢からしめんとせば、おのれ先づ賢からざるべからず。われ自ら文字に明かならずして、いかでわが子の誤れるを正し疑はしきを明め得べき。種しあらば岩にも松は生ふるものを、いでや今より學ばんも遲からじ。」とて、其の後は信藏のものまなびに行くごとに、吾も亦隣家の窓のもとに立ちつゝ、漏れくる翁の聲のまに〳〵、假名もてひそかに書きうつし、信藏の歸りきて復習する時、わが記したるを引きくらべて、「こゝはかく〳〵改めよ、そこはしか〳〵と讀まんぞ正しき。」と、絶えず傍にありて教へ導きしが、かくすること二年ばかり、遂に四書をことゞく寫しはてたりとなん。「世の中に思あれども、子をこ

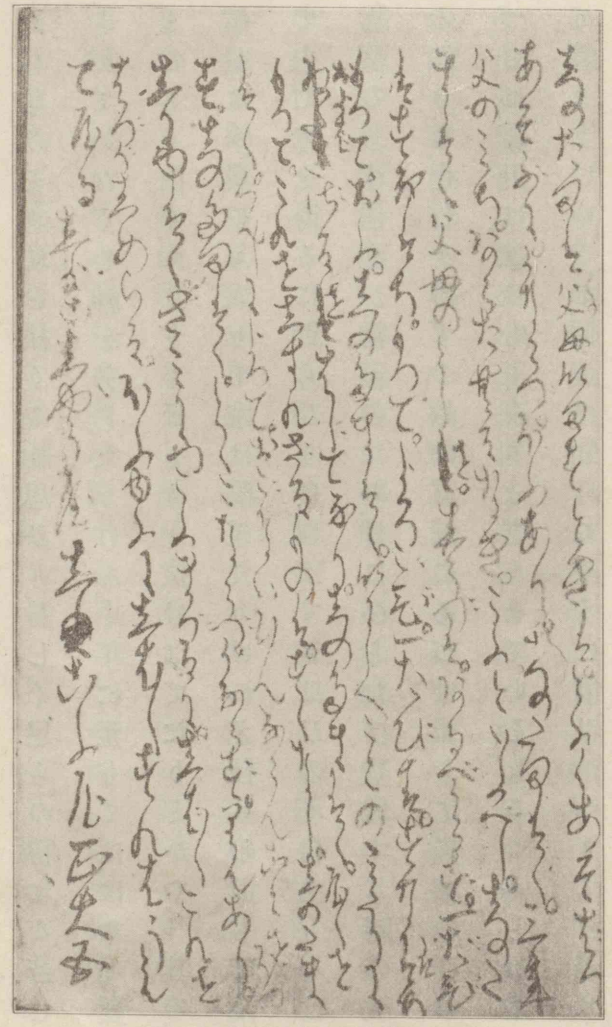
ふる思にまさる思なきかな。」とか。子を思ふは人の親の常とはいひながら、かくばかり眞心もて其の子をおふし立てしもの、思ふに世にはすくなかるべし。あはれ今孟母ともたとふべきは、この繁乃なるかな。

三度位居をかつた人

その後、信藏は藩の學校興讓館に入り、拮据勉勵して、學業大に進み、十三歳になるまで引續きて秀才の譽を荷ひければ、藩公いたくめで給ひて、黄金あまた賜ひて賞せられき。これみな繁乃が力の致すところとぞいふべき。信藏ある時、母の記しゝ假名書きの四書の、一字一句母が心血のこもれるものなるを、空しく蠹魚のすみかとなさんを惜しみて、記念としたまはらんことを請ひけるに、繁乃いふやう、「かく拙き筆の跡を殘しなば、なかゝに後の物嗤ひとなりやせん。」といなみたれども、強ひて請ひとり、は

子曰ク父母在セバ遠ク遊バズ遊ブニ必ズ方アリ
子曰ク三年父ノ道ヲ改ムルナキ孝ト謂フベシ
子曰ク父母ノ年ハ知ラザルベカラズ一ハ則チ以テ喜ビ一ハ則チ以テ懼ル
子曰ク古ヘ言ノ出サヾルハ躬ノ逮バザルヲ恥ヅレバナリ
子曰ク約ヲ以テ之ヲ失スル者ハ鮮シ
子曰ク君子ハ言ニ訥ニシテ行ニ敏ランコトヲ欲ス
子曰ク德孤ナラズ必ズ隣アリ
子游曰ク君ニ事ルニ數〻スレバ辱メラル朋友ニ數〻スレバ疎ンゼラル……公冶長第五

しがきを添へて、うるはしく綴り合せ、國字四書と名づけて永く子孫に傳へ、以て慈母のめぐみをとこしなへに忘れざるやうなしたりけり。かくて嘉永六年八月繁乃は病みて身まかりぬ。



黒井繁乃筆國字四書

齡五十歳なりき。

繁乃若かりし程は容姿端麗にて、あてに美しかりけれど、夫に別れし悲みと、老幼を扶くる物思ひと、貧しく足らぬ勝なる苦しさとにて、いたく心神を勞したりけん、中年に至りては、はや毛髪ことごとく白く、齒などもほと〳〵拔けはてたりとかや。其の頃信藏は學業やゝ成りて家は嗣ぎたりけれど、仕への道も年淺くて未だ志を得るに到らざりければ、すぎはひの不自由もなほ前と異ならず、信藏が當番のため、月にひとたび登城する時の紋服の如きも、止むを得ずつねは質舗にあづけおきて、登城の日の近づけば、繁乃は二夜も三夜もまどろまでいそしみつゝ、とかくして錢まうけいでて、信藏に知れぬやうに償ひかへりて打着せたりとぞ。其の程の心づかひ、げにいかばかりなりけん。されば繁乃の身まかりける時、信藏の悲みはいはんかたなく、かくばかり身を苦しめて、われをいつくしみ給ひし海山のなさけ、あはれいつの世にか忘るべきと深く思ひしみければ、後、累進して重職に就き、町奉行となりて秩祿二百五十石を食み、戊辰の役には米澤藩の監軍として越後口に轉戰し、明治維新の後は米澤藩少參事に任ぜられ、さてのち辭して藩の支封たる上杉子爵家の家令となりて、遂に其の身を終へしまで、つねに母の艱苦に堪へし心を心として、自ら奉ずること極めて薄く、一生の間、絶えて煙草・茶・酒類を口にする事なく、家に慶事あるごとにはこれぞ母のたまものと、先づ國字四書を戴きて厚く其の惠を仰ぎ謝したりけりとなん。

古語に曰く、「言ふは易く行ふは難し。」と。百の言ありとも一の行

三史　史記　漢書　後漢書
五經　詩經　書經　易經　禮記　春秋
三木露風　名は操　詩人

なくばなにのかひかあらん。言は行をまちてはじめて尊ければなり。世進み智開くるに從ひ、徒に言多くして行鈍きが習なるを、繁乃は言うて行はざるはなく、行ひて遂げざるはなし。三史・五經の道々しき敎は受けざりけれど、おのづから聖賢の心をさとり得て、よく孝に、よく貞に、よく慈に、人の最も難しとする所に安んじて、玉となりて一生を全うしたり。其の流風遺韻、まことに、世の人をして感奮興起せしむるものありぬべし。

二二　月と草木とのさゝやき　三木露風

いつしか雨はれて明るき空よ、
冴え〳〵とうつくし、
濡れたる月の光。

疎らなる立木の枝より
雫の落つる音しげく
なほ降れる雨かとおもふ。

一本の老樹の根株、皮剝げて
身をあらはせるに
照りたる月は鏡のごと。

水早み流るゝ橋を
わがゆけば
我が影はあり、水の上に。

われはきく今宵
月と草木とのさゝやきを、
白き魂の聲するを。

（青き樹かげ）

安藤圓秀

二三　信

安藤圓秀
漢學者
東京帝國大學助教授

子貢
孔子の門人端木賜の字

顏淵
名は回
孔子の高弟

一

水汲に出た子貢が、井戸端から目を放つた時、稍離れた軒下の竈の傍に蹲つて、克明に燃えさしの木を片付けてゐる顏淵の姿がふと目に留つた。

彼は感謝の心に一杯になつて、顏淵の姿を見守つてゐる。顏淵は薪の始末を終へると、竈に寄添うて釜の蓋を取放つた。抑へられてゐた湯氣は棒のやうに舞上つた。

一二分も經たぬうち、子貢は見てはならぬものを見た樣にぎくりとした。それは釜の中から一杓子の御飯を抄ひ出して置いて蓋をした顏淵が、暫く躊躇した後杓子の飯を食べるのが、はつきりと認められたのである。

子貢は全身に冷水を浴びた樣に感じた、名狀し難い錯雜した思が旋轉して、急遽井戸端から去つた。

二

「先生」子貢は興奮した面持で孔子の座へ近寄つた。

「先生、うかゞひますが、どんな仁者でも愈窮迫して來ると、素地の野性が出て來るもので御座いませうか。」

「勿論そんな事はない。そんなことでは仁者ではない。」

「先生。私はたつた今、情ないことを見せられました。」

三

「それは何か其許の思ひ違ではないか。私はどうしても、回を疑ふ氣にはなれぬ。回に限つて其の樣な卑しいことの有らう道理がない。これには何か仔細があらう。まあお待ち、私が訊いて見よう。」

躍起になる子貢を押鎭めて、孔子は顏回を呼んだ。

四

「先生何か御用で御座りますか。」

「今日は其許は御飯焚ぢやさうぢやな、御苦勞々々々。」

「いゝえ、子貢さんのお持ちの米のお蔭で皆々大喜で御座います。もう間も無く御食事が整ひます。」

「久し振の御飯ぢやからのう、――實はの、私は昨晩死なれた母親の夢をあり〳〵と見ましたのぢや。私たちが斯うした羽目になつてゐるから、何か蔭ながら助けて居て下さることかとも思つて、今朝は大變お懷かしく思つてゐるのぢや。御飯が出來たら御供養にお初穗を差上げたいと思ふから、少しお供へをしてくれぬか。」

「あ、左樣でしたか。それはつい不調法な事を致しました。實は先程あまり急ぎ立てゝ焚きましたものですから、出來工合がどう。であらうかと思ひまして、釜の蓋を取つて見ました時、どうしたはずみか、軒から煤の塊が釜の中へ落込みました。早速煤の附いた處だけ杓子で抄ひ取りましたが、汚れたものを神樣へのお初穗にも恐多いし、それかと申して、縱令一粒で

も、子貢さんのお情の籠つたものを棄てゝしまふのは勿體無いし、煤を取去つて、鼠色にはなつてゐましたが、私が戴いてしまひました。そんな譯でございますから、もうお初穗に差上げることは出來まいと存じます。」

「おゝさうか〳〵。何、それでは此の次に炊いた時で宜しい。皆も嘸かし待つて居ることぢやらう。早く食べられる樣世話してやつてくれ。私も一緒に戴きませう。」

「私の不行屆から本當に殘念な事を致しました。ではお支度を致しませう。」

顏淵は一禮して靜かに出て行つた。孔子は微笑しながら、

「賜や、どうぢや。」

「誠に恐入りました。」

頭山滿　政治家　もと福岡玄洋社長　浪人會の牛耳をとる

「私は何處迄も回を信じてゐる。私の信賴は決して裏切られる事は無いと思ふ。――のう賜や、私は却て其許の疑ふ心を淺ましく思ふのぢや。だが決して其許ばかりを責めようとは思はぬ。お互に道によつて結び付けられてゐる私たちが、如何ほど飢に苦しまうとも、僅か一杓子の飯を中心にして、互に淺ましい疑を抱かねばならぬことを悲しく思ふのぢや。」

孔子は忍び難い闇然たる思ひに鎖されて堅く口を噤んだ。

「誠に――誠に何とも申譯がありません。」

身の置處も無いやうに恥ぢ入た子貢は、其の場にひれ伏して暫くは身動きもし得なかつた。（孔子とその徒に據る）

二四　愼獨と無慾

頭山滿

大西郷　西郷隆盛

主靜立人極　宋の周敦頤の語

小人閑居して　大學にある語

聖福寺　筑前國博多にある臨濟宗の寺

仙厓　江戸後期のすぐれた禪僧　天保八年(一八三七)寂す

大西郷の遺訓に「至誠の域は先づ愼獨より手を下すべし。閑居は卽ち愼獨の場所なり。小人は此處萬惡の淵藪なれば、放肆柔惰の念起らざるを愼獨とはいふなり。是れ善惡の分るゝ所なれば、心を用ふべし。古人曰く『主靜立人極』と。是れ其の至誠の地位なればなり。愼まざるべけんや。」といふ一條がある。「萬惡の淵藪」とはよくも言はれたものだ。閑居ほど毒なものはない。「小人閑居して不善を爲す、至らざる所なし。」である。

聖福寺の仙厓和尙のところへ、さる博多の商人が來て、

「どうか私にも參禪さして下さい。」

と賴んだ。ところが仙厓さんの言はつしやることには、

「お前たちが、座禪なんて、いらんこと、いらんこと。坐り込んで考へとると、碌なことは出て來ん。一寸した物を人に貸しとることまで思ひ出して、利息の勘定が浮ぶぐらゐが關の山ぢや。働け、働け。働いてをるのが何よりの禪學ぢや。」

と追ひ返してしまうたといふ話だ。働いてをつても碌なことは考へてをらんのぢやから、坐り込んだらどんな事を考へるか知れたものでない。

仙厓といふ和尙は面白い和尙であつたやうだ。盲目が提灯をさげて、杖をついて歩いてゐる畫をかいて、贊をしてござるのに、

「書物は讀み覺えても智慧がなければ、盲目の提灯、邪魔になれども、何の益もない。」

盲目の提灯が、近頃は學校の門前に一杯になつてゐる。

又、「一家の親睦を圖るには、世人は多く人倫五常の道をいふ。然れどもこれは當然の看板のみにして、今日の用に益なく、怠惰に

月照和尚ノ忌日ニ賦ス

相約シテ淵ニ投ズル後先無シ豈圖ランヤ波上再生ノ緣アラントハ頭ラ回ラセバ十有餘年ノ夢空シク幽明ヲ隔テテ墓前ニ哭ス

墮ち易し。速かに手を下すには、慾を離るゝこと第一なり。一つ美味あれば、一家擧つて食し、衣服を製するにも、必ず良きを長に讓り、自己を顧みず、互に誠を盡す可し。只慾の一字より、親族の親しみも離るゝものなれば、其の根據を絶つこと肝要なり。されば慈愛自然に離れざる樣になるものなり。」とある。

四郷南洲遺稿

月照和尚忌日賦

相約投淵無後先豈圖波上再生緣四頭十有余年夢空傷幽明墓前哭

「慾」の一字を去る、これが人情の極致である。慾があればこそ、迷も生ずるのだ。

「本來無一物、我れなしと思ひ切るところに、一切を生ずるのだらう。古來、名僧善知識といふものも、聖人君子の達道といふものも、「慾」の一字を振り切るところに存してゐるものだ。治世の要道とて、所詮は此の外に出でまい。

毛利元就が死なんとする時、子供等を集めて、一本の矢を折らせ、次に五本の矢を合せて折らせたところが、一本の矢は手もなく折れたが、五本の矢は滿身の力を以てするも遂に折れなかつた。そこで元就が、

「毛利家も亦この通りぢや、兄弟仲違をして、ばら〳〵になつてゐたら、直に他人に滅されてしまふ。如何なる時でも、五人の兄弟が一緒になつてゐれば、決して倒れるものではない。」

と遺言した話は、小學校の子供も知つてゐる。その時一同默つて聞いてゐたが、三男坊の隆景が、ひとり口を開いていふには、

「五本の矢が折れぬ理窟は分りましたが、五本の矢が何時も一

隆景
小早川隆景
毛利元就の三男
備後國三原城主
慶長二年（一五九七）
歿す

天の空しき　海濶クシテ魚ノ躍ルニ從ヒ天高クシテ鳥ノ飛ブニ任ス（古今詩話）

ピヤノ　Piano

芥川龍之介　小説家　昭和二年歿す

緒になるには、何ぞ工夫がなくてはなりますまい。不肖隆景の考では、兄弟仲をよくするには、たゞお互に慾を去るにあらうかと存じます。お父さま如何なものでござりませう。」

流石は小早川隆景といはれる人物だ。五人の兄弟の中でも、第一等の傑物であつたと見える。

慾を去ることは己れを空しうすることである。己れを空しうすれば、こゝに萬物を生ずるのだ。彼の蒼々たる天の空しきを見よ。又彼の茫々たる大海の濶きを見よ。鳥の飛ぶにまかせ、魚の躍るにまかせ、少しも滯りがない。これ全く己を空しうして萬物を容れるからである。（大西鄕遺訓）

芥川龍之介

二五　ピヤノ

スレート　Slate　洋風建築の屋根を葺くに用ひる板石

雨のふる秋の一日、わたしは或人を訪ねる爲に横濱の山手を歩いて行つた。この邊の荒廢は震災當時と殆ど變つてゐなかつた。若し少しでも變つてゐるとすれば、それは一面にスレートの屋根や煉瓦の壁の落ち重なつた中に藜の伸びてゐるだけであつた。現に或家の崩れた跡には、蓋をあけた弓なりのピヤノさへ、半ば壁にひしがれたまゝ、つやゝかに鍵盤を濡らしてゐた。のみならず大小さまゞの譜本も、かすかに色づいた藜の中に、桃色・水色・薄黄色などの横文字の表紙を濡らしてゐた。

わたしは訪問先で或込み入つた用件を話した。話は容易に片づかなかつた。わたしはたうとう夜に入つた後、やつとその人の家を辭することにした。それも近々にもう一度面談を約した上のことだつた。

雨は幸にも上つてゐた。おまけに月も、風立つた空から、時々光を洩らしてゐた。わたしは汽車に乘り後れぬ爲に出來るだけ足を早めて行つた。

すると、突然聞えたのは、誰かのピヤノを打つた音だつた。いや、「打つた」と言ふよりも寧ろ觸つた音だつた。わたしは思はず足をゆるめ、荒凉としたあたりを眺めまはした。ピヤノは丁度月の光に細長い鍵盤を仄めかせてゐた。あの藜の中にあるピヤノは。——しかし人影はどこにもなかつた。

それはたつた一音だつた。がピヤノには違ひなかつた。わたしは多少無氣味になり、もう一度足を早めようとした。その時わたしの後ろにしたピヤノは確かに又かすかに音を出した。わたしは勿論振りかへらずにさつさと足を早めつゞけた。濕

氣を孕んだ一陣の風のわたしを送るのを感じながら。

わたしはこのピヤノの音に超自然の解釋を加へるには餘りに理性が勝つてゐた。なるほど人影は見えなかつたにしろ、あの崩れた壁のあたりに猫でも潜んでゐたかも知れない。若し猫でなかつたとすれば、——わたしはまだその外にも鼬だの蟇がへるだのを數へてゐた。けれども、とにかく人手を借らずにピヤノの鳴つたのは不思議だつた。

五日ばかりたつた後、わたしは同じ用件の爲に同じ山手を通りかゝつた。ピヤノは相變らずひつそりと藜の中に蹲つてゐた。桃色・水色・薄黃色などの譜本の散亂してゐることも、やはりこの前に變らなかつた。たゞ今日はそれらは勿論、崩れ落ちた煉瓦やスレートも秋晴れの日の光に輝いてゐた。

わたしは譜本を踏まぬやうにピヤノの前へ歩み寄つた。ピヤノは今目のあたりに見れば鍵盤の象牙も光澤を失ひ、蓋の漆も剝落してゐた。殊に脚には海老かづらに似た一すぢの蔓草もからみついてゐた。わたしはこのピヤノを前に何か失望に近いものを感じた。

「第一これでも鳴るのかしら。」わたしはかう獨語を言つた。するとピヤノはその拍子に忽ちかすかに音を發した。それは殆どわたしの疑惑を吐つたかと思ふ位だつた。しかし私は驚かなかつた。のみならず微笑の浮んだのを感じた。ピヤノは今も日の光に白々と鍵盤をひろげてゐた。が、そこにはいつの間にか落ち栗が一つ轉がつてゐた。

わたしは往來へ引き返した後、もう一度この廢墟をふり返つた。

やつと氣のついた栗の樹はスレートの屋根に押されたまゝ、斜めにピヤノを蔽つてゐた。けれどもそれはどちらでも好かつた。わたしはたゞ藜の中の弓なりのピヤノに目を注いだ。あの去年の震災以來、誰も知らぬ音を保つてゐたピヤノに。

（うめうまうぐひす）

薄田泣菫
名は淳介
新聞記者
文學者

二六　萩

薄田泣菫

ことしの夏は、とても凌ぎ難いといつたやうな暑さは、僅か二三日しかなかつたやうです。八月の二十日過だといふのに、朝夕の風に、涼しさといふよりも、むしろ冷たさを感じるやうになりました。

夏より秋への移り變り、この季節の感情を最もよく表現するも

のに、萩があります。天鵞絨のやうな花片を持つ天竺牡丹、駝鳥のやうな強健な長い脚をして、大きな支那皿のやうな花を高くさし上げた向日葵――かういつた夏の花のもつ榮華と矜持とは漸く衰へかけて、これまでの草木には見られなかつた寂默と謙虚とが、多かれ少なかれ、すべての花に現れ初めるのはこの頃であります。

萩　（東京向島百花園胡枝花洞）

その中でも、萩はとりわけ謙虚な花であります。かはいらしい卵形の三つ葉、しなやかな撓み易い莖、蝶形の小さな花片――どこに一つこれ見よかしな氣取つたところのない、地味なみすぼらしい花ですが、それでゐて不思議に神經の鋭さと感じの細やかさとを持つてゐます。ほの暗い物蔭にゐて、有るか無いかの風にも、葉を顫はせ莖を動かせて、しな〳〵と搖れるのはこの花です。露のみか、日光の重みにも堪へかねて、ともすると土の上に突つ伏して、かすかに吐息をついてゐるのはこの花です。萩はまた笑ひます。だがその笑はいつも寂しい微笑で、この花がほのかに微笑する時は、不思議にも寂默と肌ざはりの冷たさとが、香のやうに四邊を籠めるのが感じられます。

萩が持つてゐるもので、他の草木にめつたに見られないのは、羞恥の感じです。萩の莖は弱い、花の心は餘りにつゝましい。萩はそれが――いや、そればかりではない、土の中からすく〳〵と

伸びあがつて、明るい外光と氣輕な大氣に觸れてゐる事すらが、氣恥づかしくてたまらぬやうにはにかんでゐます。私はこの頃よく野山を歩き廻ります。そして途で萩の花の咲いてゐるのを見ると、思はず聲を出して、

「あ、こゝにも萩が咲いてゐるな。」

と獨語を言ふことがよくありますが、その次の瞬間にははつとして、あんなに聲を出してよくなかつたと後悔する事が度々あります。それなども、その場合萩の持つてゐる羞恥を、何處となく身に感ずるからだと思ひます。

この羞恥感は、それは本當に女性らしい女性の感じで、これあるが故に、萩は永久に人間の愛を失ふことはあるまいと思はれます。

昭憲皇太后
明治天皇の皇后
藤原美子
大正二年崩御

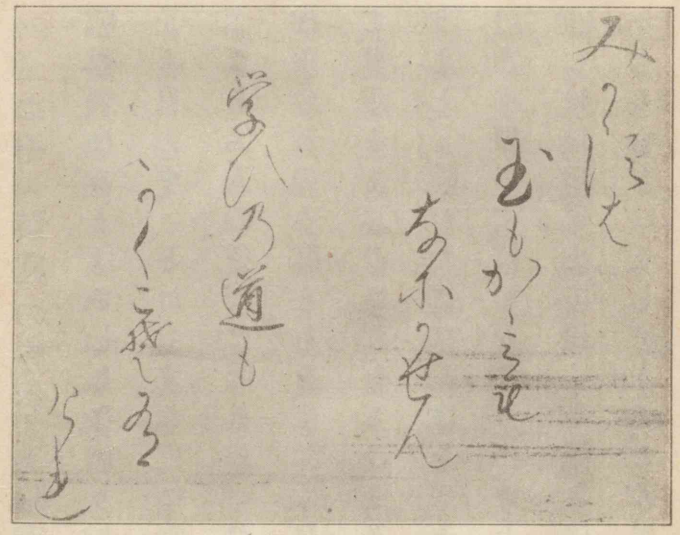
上
明治天皇
皇太后
英照皇太后
孝明天皇の皇后
藤原夙子
明治三十三年崩御

二七　禁庭の野分　（昭憲皇太后御作）

朝露のひるまはさしもなかりし空の、俄かにかき曇り夕づつの光も見えず。とかくする程に雨いたく降り出でて、ほとり近く語りあふ人の聲だに聞きわかぬまでになりぬ。閨に入る頃は尙雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに、雷さへ鳴りはたゝきて、夢現とも思ひさだむるひまなく稲妻のきらめき渡る、いとけうとし。曉がたには雨はをやみぬれど風烈しう吹き出でて、宮の内もゆるぐばかりなるに、いとゞ目もあはず。

上には民の爲とて、畏くも遠き境に出でましたるほどなれば、いかなる行宮にまし〳〵て、この風の音に御心を惱まし給ふらん。皇太后の宮にはいかにおはしますにか。幼き宮たちも驚きや

みがかずば玉もかゞみもなにかせん學びの道もかくこそありけれ



昭憲皇太后御筆

し給ふらんと思ひ續くる程に、夜も明けぬれど、未だ風靜まらで、いづこもおろし籠めたる、いと物むづかし。軒近き栗の枝の結べる實ながら吹折らるゝ音いと烈しく、御階の下の芭蕉も、筒井の傍なる柳も、皆折れふしぬ。今を盛りと見えし眞萩も、名殘なく散り亂れたる、いとさびしく見ゆ。宮の內だにかく荒れぬるを、ましてあやしげなる賤が家居などは倒れぬるも多からんなど思ひやれば、すゞろに悲し。

一萬 曾我祐成
箱王 曾我時致

おしなべて實りよしと聞きつる千町田の稻も吹きそこなはれつらんやなど、心にかゝりて、

國のため科戸の神も心して、
稻葉の上はよきて吹かなん。

なほとやかくと胸をいたむるほどに、いつとなく靜まりて、日影まばゆく雲間にさし出でぬるに、おのづから人の心もおちゐにけり。（昭憲皇太后御集）

二八　空行く雁

頃は人皇八十一代安德天皇の養和元年辛丑、新玉の年立返りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、「いかに、母御前。父はいづくにおはしますぞ

曾我殿　曾我祐信
工藤一萬　工藤祐經
鎌倉殿　源頼朝

や。其の佛は何處にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせ給へ。」といひければ、はるかに忘れたるこし方も今更思ひ出されて、消えいるばかりなり。母泣く〳〵のたまひけるは、「あの曾我殿こそ己らが父にてあれ。」と心強く語られければ、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。

箱王重ねて申しけるは、「父御前は、まことやらん、狩場より歸り給ふ道にて、工藤一萬とやらんに射られ、死に給ひぬと兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきりものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我らをも殺さんとや思ふらん。我らが此の里にありと知らでや過ぐらん。」などおとなしく語りければ、母より始めて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。

河津殿　河津祐泰

かくて、夏も過ぎ、秋もたけ、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びけるに、五つ連れたる雁がねの南をさして飛び行くを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ、箱王殿。空に飛ぶ翼も別の翼ぞ交へざりける。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。物言はぬ鳥類すらかくの如し。我らは人倫に生れながら、わどのは弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我らが父をば河津殿と申してありきとかや。父だ

空行く雁（繪本曾我物語）

に世におはしまさば馬・鞍をも賜はり、弓・矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者にも、馬・鞍・弓・矢を持ちて物を射ありく者のあるが羨ましさよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつよりも今宵は父御前のこひしく思ひ參らせらるゝぞや。」とて、袖に顏をさし入れてさめ〴〵と泣きければ、弟もこざかしく顏をあはせて泣き居たり。一萬の乳母の女房これを聞きつけ、「あな、あさまし。人もこそ聞け。いかに、和上薗たち、夜も更けぬるに、さやうにてはおはするぞ。とく〳〵入らせ給へ。」とおそろしげにいひければ、二人の者は門外へ逃げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて、後に內へは入りにけり。（曾我物語）

二九　夕ぐれの時はよい時

堀口大學
詩人

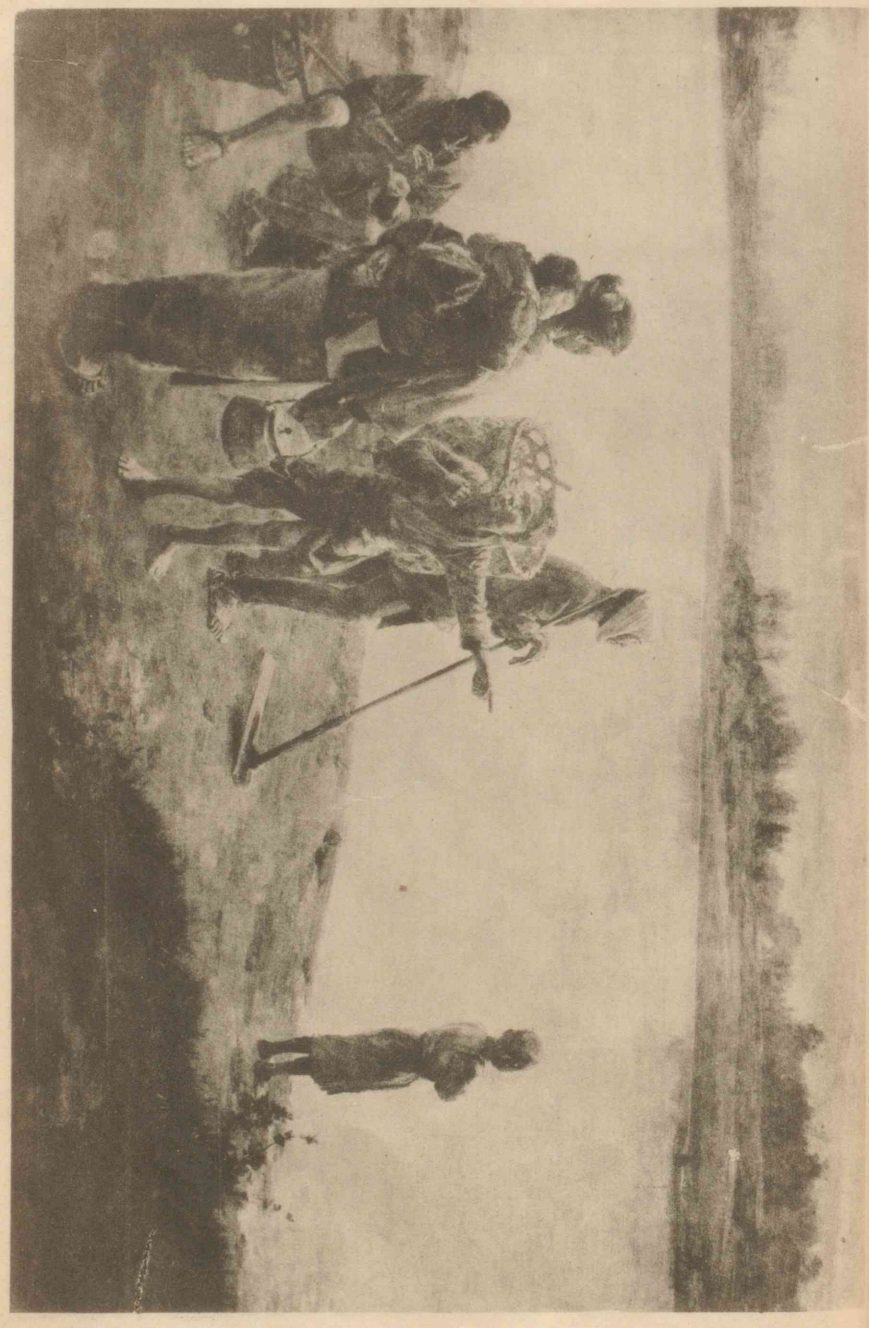
夕ぐれの時はよい時、
かぎりなくやさしいひと時。

それは季節にかゝはらぬ。
冬なれば煖爐のかたはら、
夏なれば大樹の木かげ、
それはいつも神祕に滿ち、
それはいつも人の心を誘ふ、
それは人の心が、
ときに、しば〳〵
靜寂を愛することを
知つてゐるものゝやうに、

小聲にさゝやき、小聲にかたる……

夕ぐれの時はよい時、
かぎりなくやさしいひと時。

若さにほふ人々のためには
それは愛撫に滿ちたひと時、
それはやさしさに溢れたひと時、
それは希望でいつぱいなひと時、
また青春の夢とほく
失ひはてた人々のためには
それはやさしい思ひ出のひと時、



暮夕の頭渡（筆作英田和）

それは過ぎ去つた夢の酩酊、
それは今日の心には痛いけれど
しかも全く忘れかねた
そのかみの日のなつかしい移り香。

夕ぐれの時はよい時、
かぎりなくやさしいひと時。

夕ぐれのこの憂鬱はどこから來るのだらうか？
だれもそれを知らぬ！
（おゝ！だれが何を知つてゐるものか）
それは夜とともに密度を増し、

人をより強き夢幻へみちびく……

夕ぐれの時はよい時、
かぎりなくやさしいひと時。

（遠き薔薇）

三〇　讀書

坪内逍遙
名は雄藏
文學者
文學博士
早稲田大學名譽教授

坪内逍遙

常に良き著述に親しむ者は、只獨り居れども寂しきことを覺えず、師を求めざれども日に月に學ぶ所あり。失意にも慰み、不平・憂悶も之を忘る。「書は少年の滋味にして老年の娯樂なり。順境には心の飾ともなり、逆境には庇護と慰安とを與ふ。家に在れば心を樂しましめ、外に出でたる時も邪魔とはならず。夜の伴、旅の伴、僻地の伴。」と羅馬の名士キケロの言ひたるも同じ心なり。されど、かくの如きは人の讀書より受くる最大の利益にはあらず。

キケロ
Cicero
ローマの雄辯家政治家文學者

諺に「百聞一見に如かず。」といへるは、何事も其の身親しく經驗するに如かずといふ意味なれども、人の壽命に限あれば、七十・八十まで生きたりとも、目に視、耳に聽くことは幾何もあるべからず。我が日本國内の山水・風俗だけにても一生には觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大なるを思ひ、時の窮なきを思へば、人間一身の經驗の狹く、淺く、小さく、且少なかるべきは言ふにも及ばぬ事なり。されば、こそ、今も昔も苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を看んと欲する人々は、一方には見聞を勵み、經驗を努むると共に、他方には廣く内外古今の名著を得て之に親し

ランビキ Lambique 蒸餾器

ペトラルカ Petrarca (1304—1374)

まんことを願ふなれ。所謂名著は、人間世界開けてこのかた凡そ三千年間に出でし大賢・高德・碩學・大才の經驗・觀察・思索・想像をそのまゝに、又はランビキにかけて傳へたるものなり。或は顯微鏡・望遠鏡に譬ふるも可なり。固より人工に成りたるものなれども、人をして肉眼にて看得ざる微なるものをも、遠く且大なるものをも看取せしむ。後れて生れたる者にして良書の助を籍ることなく、只其の貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も、人間界の事も、纔かに一斑を窺ふに過ぎざるべく、其の一斑だにも正しく明かには看得ざるべきが常なり。要するに、書は知識の寶庫にして、兼ねて智を研く砥石なり。しかしながら讀書の用は尙之に盡きたるに非ず。

伊太利の詩人ペトラルカは曰く、「予に良友あり。彼等は皆名士。

チャンニング Channing (1780—1842) 米國の宣教師で著述家

ミルトン Milton (1608—1674)

大家にして、何れも偉業を成したる者なり。予若し其の助を藉らんとすれば、彼等は喜んで我が請を容る。」と。是、良書が常に其の讀者を啓發し、誨導し、鼓舞し、奬勵する力あるをいへるなり。

北米の名士チャンニングも亦曰く、「吾人が傑出せる心と相語ることを得るは、おもに書籍の媒介に因る。而してかゝる價知らぬ交際の手段は、衆人の自在に用ひ得る所なり。最良の書に在りては、俊傑、吾人に對ひて語り、其の最も貴き思想を吾人に與へ、且其の心靈を吾人のために吐露す。」と。英國の詩人ミルトンもまた曰く、「良書は保全蹈襲して後世に傳へられたる俊傑の貴重なる生血なり。」と。

人は良書に親しみて、まづ我が卑小なるを知るなり。次には或は他の識見の大なるに驚き、或は品性の高きに感じ、「嗚呼、同じく

人といふ、高く、清く、美しく、偉なることかくの如きものもあるか」と歎ずるなり。若し假初にも其の偉なるもの、美しきもの、清きものに私淑し、之に倣はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書の用極れるにちかしといふべし。（中學修身訓）

新定女子國文　卷五　終

昭和三年二月二日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

昭和二年二月廿五日　印刷
昭和二年二月廿八日　發行
昭和三年二月廿一日　再版印刷
昭和三年二月廿一日　再版發行

新定女子國文
〔全十册〕

定價	
卷一、三、四、十	金四十錢
卷二、	金三十九錢
卷五、六、七	金三十七錢
卷八、九	金三十八錢

新定制度價	
卷一、三、四、十	金六拾一錢
卷二	金六拾錢
卷五、六、七	金五拾七錢
卷八、九	金五拾八錢

不許複製

著作者　吉田彌平
發行兼印刷者　東京市神田區今川小路二丁目十二番地　金港堂書籍株式會社
代表者　原安三郎
印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社
發賣所　東京市神田區今川小路二ノ十一　振替貯金口座東京八八一五番　金港堂書籍株式會社

松山市二番町五三
石見洲氏